慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 飯沼山圓福寺蔵源氏物語「まほろし」帖 : 解題・影印・翻刻 |
| Sub Title | The "Maboroshi" Chapter of Genji Monogatari from the Iinumasan Enpukuji Collection : A Bibliographical Survey with a Facsimile and Transcription |
| Author | 佐々木, 孝浩(Sasaki, Takahiro) |
| Publisher | 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫 |
| Publication year | 2018 |
| Jtitle | 斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.53 (2018. ) ,p.1- 96 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20180000-0001 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 飯沼山圓福寺蔵　源氏物語「まほろし」帖

## ―解題・影印・翻刻―

佐々木　孝浩

### 序言

日本古典文学の散文作品を代表する存在である『源氏物語』は、原初的な成立より一千年を超えており、何時の時代にも非常に人気のあった作品でもあるので、その伝本の数も写本・版本共々膨大であり、どれほど作製され、どれだけ現存しているのか推測がつかないほどである。やはり代表的な散文作品である『伊勢物語』共々、室町時代以前に書写された古写本にも恵まれた存在なのである。しかしながら『伊勢物語』が、中世期に一般的であった装訂である綴葉装の一帖で収まるのに対し、同装訂で五四帖に仕立てられることの多い『源氏物語』は、伝来の過程で欠落が生じてしまうのが常のことであり、成立時の完備した姿のままで現存する伝本は、少なくとも南北朝期以前には一本も確認できないのである。数十帖がまとまっていればよい方であり、わずかに一帖のみが伝存していることも珍しくはない。それどころか、一帖にすら満たなくなったような残欠本を中心として、江戸時代以降に一頁単位で分割されて、「古筆切（こひつぎれ）」と呼ばれる書の美術品になったものも数知れない程に存しているのである。

そのような膨大な『源氏物語』写本の山に敢然と立ち向かい、三〇〇点一五〇〇冊を超える伝本を調査して、その本文の分

類を行った上で、選び抜いた古写本を用いて詳密な校本を作成し、それを元にした語句索引のみならず、研究・資料・図版などをも加えた、同物語の本文研究の金字塔とも言える、『源氏物語大成』全八巻（中央公論社、一九五三～六）を完成させたのが池田亀鑑（一八九六～一九五六）である。完結後まもなく逝去したことは、その調査研究と編纂の過酷さを象徴しているようでもあるが、この大成が以後の『源氏物語』研究に与えた恩恵と及ぼした影響は、計り知れないものがあるのである。

しかしながら、それがあまりにも便利で完成度も高かったために、どうしてもこれに頼りがちとなり、その弊害と呼びうるような負の影響もあったことも否めない事実である。その恩恵に与る研究者は、優れた先行研究に必ずそうした側面があることを認識して、それを乗り越える方途を模索していくべきなのではないだろうか。その実践例として注目できるのが、加藤洋介氏による一連の大成の増訂作業あろう。『河内本源氏物語校異集成』（風間書房、二〇〇一）を刊行したばかりか、「源氏物語校異集成（稿）」をホームページ上で公開して、新しい伝本をも加えて、より精緻な校異データを提供してくれているのである。それは長命であれば、池田が目指したであろう仕事であることは疑いないのではないだろうか。

この「大成」と「集成」を利用することによって、我々は手元にある伝本の本文の系統や特徴を容易に明らかにすることができるのである。その学恩に報いる道は様々にあるであろうが、それらが様々な理由で用いることができなかった、価値ある伝本を紹介することもその主要な方法の一つであろう。

ここで紹介しようとする古写本は、神亀五年（七二八）に海中から掬い上げられた十一面観世音菩薩像を本尊として、空海によって弘仁年間（八一〇～八二四）に開基されたと伝えられる古刹で、坂東三三観音の第二七番札所でもある、千葉県銚子市の飯沼山圓福寺に所蔵される「幻」一帖である。少なからぬ『源氏物語』の古写本中で、屈指の書写年代の古さを有するのみならず、造本的にも格の高いものであると考えられるものであり、「幻」帖の研究において必ず参照されるべきであるのは勿論のこととして、『源氏物語』の本文系統を考察する上でも重要な情報を与えてくれる存在なのである。

この本はその存在は知られてはいたが、学界的には所在不明となっていたものである。したがってその本文の紹介は今回が初めてとなる。この貴重な伝本の紹介を許可下さった、圓福寺

御住職の平幡照正師に衷心より感謝申し上げたい。

## 解題

### 一、書誌情報の確認

この本の存在を世に伝えたのは、数多くの善本を取り扱ったことで広く知られる、古書肆の弘文荘である。その『弘文荘待賈古書目』を中心とする販売目録類は、CDやDVDあるいはWEBでも全頁の画像が公開され、そこに掲載された書目は五〇音順に配されて、『弘文荘待賈古書目総索引』（八木書店、一九八九、増訂版・一九九八）として刊行されている。その少なからぬ目録の中でも、創業五十周年記念として編纂された『弘文荘敬愛書図録』（一九八二）は、質量ともに際立つ一冊として著名なものである。この本はその図録に、「8 古本源氏物語幻の巻 伝西行法師筆 鎌倉初期古写 一冊」として掲載されものである。弘文荘単独の目録は、詳細な解題においても定評があり、圓福寺蔵本についてもA三判二段組一頁分の書誌情報と解説が、カラーの表紙を含め巻首ほか四箇所の画像と共に掲載されているのである。その記述を参照しつつ、この「幻」帖の基本的な書誌情報についてまとめておきたい。

### 飯沼山圓福寺蔵〔源氏物語〕「まほろし」

伝西行筆〔鎌倉初期〕写　枡形綴葉装　一帖

墨流し地に、金銀の切箔と砂子で雲霞を加え、金銀泥と緑青で牡丹の枝を描いた原表紙（一六・三×一五・三糎）。中央打付外題「廿五〔ま〕ほろし」（本文異筆）。見返し本文共紙。料紙は上質の雲母引楮打紙。四折（四（前二枚は表紙裏と見返しとして貼り付け）・四・五・四紙（後二枚は遊紙（もとは見返しか）と表紙裏））。墨付三〇丁。遊紙後一丁。半葉一一行書。字高約一五・〇。和歌は二字下げで書き始め、成り行きで改行し、二行目は行頭から始めて、そのまま地の文が続く。本文は全帖一筆で、同筆と思われる見消ちや補入の他、片仮名の振り仮名が少々見られる。

後遊紙裏左下に「墨付卅枚」と後筆墨書あり。この他、前見返し左肩に「源氏幻之巻 全部 西行法師筆」（一二・六×二・九）との貼紙がある。また裏見返し全面に、「右一冊者／西行法師真蹟稀有之／品也珍重々々／　筆蹟関（「古筆」朱印）」と、筆

跡などから古筆家第九代了意（一七五一～一八三四）のものと思われる、灰青色地銀砂子散し紙を用いた極書が貼られている。近時製作である桐と黒漆の二重箱入り。

続いては右の情報から得られる、この本の書物としての性格についてまとめておきたい。

**ア　書写年代**

弘文荘目録の解説（以下「目録」と略称）に、「現存の「源氏」としては、最古のものの一であろう」とするように、圓福寺蔵本（以下円福寺本と略称する）の価値の第一は、その圧倒的な書写の古さにある。江戸時代の徳川幕府公認の筆跡鑑定家である古筆家の当主が、西行（一一一八～一一九〇）筆と極めているのは伊達ではないのである。古い時代のものほど、江戸時代の古筆鑑定家の鑑定が信用ならないものであることは常識的なことであり、鑑定された人物の生存期頃の書写であると推定している、と考えるのが穏当であることも、現代の研究者の間ではほぼ共通理解となっているのではないだろうか。

目録でも、「西行筆として最も確実な国宝一品経和歌懐紙中の、「円位」と署名した「薬草喩品」の和歌二首の仮名と比較すると、通うところもなくはないが、彼の殆ど抑揚のない線の流れと、これのかなり抑揚に富んだ筆つきの間には、同一人とは考えにくい差がある。あれは如何にも平安末期的、これは確かに鎌倉の風気を示すものであろう。（中略）それにしても、ほぼ西行の晩年ころに当たる年代の写で」と、一応真筆であるかどうかを検討した上で、書写年代が西行の生存期間に重なる可能性を示しているのである。

目録では、鑑定書が誰のものとも記してはいないが、その筆跡からすると、古筆鑑定宗家の古筆家の弟子筋の家である神田家に生まれ、宗家を継いで九代となった了意（一七五一～一八三四）のものであると思われる。宗家代々が用いている「琴山」印を用いていないことからすると、息子伴に家督を譲った後のものであろうか。

ここで些か古筆鑑定家について略説しておきたい。

主に欠損のある古典籍を切断して、一枚単位の書の美術品に仕立てたものを「古筆切（こひつぎれ）」と呼び、その蒐集が江戸時代に上流階級を中心に流行した。誰が定めたかは明確ではないのだが、早い時期から筆者によって整理するという決まりが存しており、必然的に筆跡鑑定を職業とする人物や家が登場することとなっ

た。その最初の人物が古筆了佐（一五七二～一六六二）であり、その子孫が本家と別家に分かれ、共に幕府召し抱えとなって、近代に至るまで筆跡鑑定を行い続けたのである。またその門弟たちで、独立して一家を構えたものも少なくない。

確たる証拠があったり、非常に特徴的な筆跡であることなどから、正しく鑑定できる場合もあるにはあるものの、古いものの多くは、信頼できる比較対象なども殆どなく、筆者を明らかにすることは不可能なことであることは明白である。鑑定家達は無理を承知した上で、間違っていることを自覚しつつ鑑定を行っていたのである。それでも専門家の仕事であるので、その切や書物が書かれた時期と、筆者とされた人物の活躍時期との一致率は、現代の目から見てもかなり高いのである。また署名などがあることから、書写した人物が明らかな事例がある場合には、その筆跡と似通っていることで、その人物の筆と判断したらしいと思われる事例も少なくない。鑑定家達も彼等なりの矜持を抱いて仕事をこなしていたのである。

どうせ誤っているのならば、無名な人物と鑑定するよりも、著名な人物の方が、鑑定依頼者にも喜ばれるということもあるのか、古筆切の伝称筆者には高名な人物が多い。江戸時代に愛好者達のために編纂された、筆者単位で纏められた古筆切リストの代表的な存在である、安政五年（一八五八）刊の『新撰古筆名葉集』を眺めると、聖徳太子に菅原道真、長明に兼好、平清盛に源頼朝・義経・実朝、紫式部に北条政子といった具合に、有名人の大行列といった趣すら感じられるのである。

当然僧侶歌人の代表的な存在である西行も立項されており、そこには彼の筆跡と判断された一〇種の古筆切の情報が掲載されている。西行が古筆切の世界でも人気であったことが理解できるのであるが、そこには「六半　源氏」ともあり、円福寺本と同様な枡形本の『源氏物語』の切があるらしいことも判る。

膨大な量の古筆切を調査して、作品のジャンルと伝称筆者の年代別に分類して、画像と詳細な解説を提供した、故小松茂美博士の『古筆学大成』全三〇巻（講談社、一九八九～一九九三）は、古筆切最大の編纂物であり、その研究に欠くべからざる最重要の基本文献である。その第二三巻（一九九二）に「源氏物語切」が集成されている。

そこには西行筆と鑑定されている源氏物語切が五種掲載されている。図版を見ると全て手が異なっていることは瞭然としているが、癖の強い（一）を除く四種はある程度の近似性は認め

られるのである。小松茂美博士による解説では、それらの推定書写年代は、一一五〇年頃のものから一三世紀後半頃までとばらつきはあるものの、鎌倉時代以前となっていることは確認しておきたい。

この他にも、天理大学図書館には西行筆とされる「たけかは」一帖が存している。『弘文荘待賈古書目十一号』（一九三八・五）に掲載後に同図書館蔵となったもので、『天理図書館善本叢書和書之部第三十巻 源氏物語諸本集二』（八木書店、一九七八）に影印が存するものである。目録に、「大島景雅翁旧蔵の伝西行筆「竹河」の巻と対照しても別である」と言及されているのがこの本で、大島雅太郎・戸川残花ら近代の著名な蔵書家の旧蔵本でもある。この本も筆跡こそ異なるものの、弘文荘の古書目でも「鎌倉初期古写」・「書写年代は鎌倉時代初期を下らず、或は平安朝末期かと見ゆるもの」とあり、諸本集の曾沢太吉解題でも、『源氏物語大成』「研究資料篇」の同本解説に「鎌倉初期をくだるまいと思はれる」とある部分が引用されている。

さらに静嘉堂文庫蔵にも、西行筆と鑑定された枡形の「竹河」帖が存している。こちらは文字粒も小さく本書とは印象もかなり異なっている。もちろん別筆であるが、やはり鎌倉期の古写本であることは確かなのである。

このように、歴とした古筆鑑定家によって西行筆とされていることの意味は決して軽くないのである。

### イ　表紙

この「まほろし」帖の価値は、その書写の古さにばかりあるのではない。目録でも表紙の装飾について記した上で、「雅麗なもの。製作当時の絢美さが想像される」、と記されているように、ほぼ原装のままで現在まで伝わった稀有な存在なのである。表紙は長い伝来の間に痛み汚れてしまったり、更には失われてしまいがちであるので、後世に改められることは珍しくない。書写が古く価値も認められたものは、身分が高かったり、財力に富んでいたりするその時々の所蔵者によって、そのような人々が嗜み愛好していた茶道の世界で珍重されていた、金襴や緞子・錦などといった高級な絹織物の表紙に付け替えられることが多かったのである。

であるので、古いものほど原表紙が状態の良いままで伝わることは稀である。原表紙が残っていれば、そこから当時の装飾紙の製作技法や、その時代の美的感性など様々な情報を得ることもできる。原装であることの価値は極めて高いのである。

円福寺本も経年劣化による若干の痛みも存するものの、目録に「保存極良」と記されているように、鎌倉初期のものとしては奇跡的な状態であると言える。

表紙に用いられているのは墨流し紙である。これは水面に墨汁と油か松脂を交互に落とし、幾重にも輪を形作って、それを息や扇の風などで不規則な模様に変形させて、上から静に覆った紙で写しとる技法である。

墨流し技法は、多くの紙の装飾法と同様に中国から伝わったものと思われる。高名な在原業平の息滋春（しげはる）が、「すみなかし」の語を詠み込んだ歌が、延喜五年（九〇五）の序文を有する『古今和歌集』に見えていることからすると、九世紀中には日本に伝わっていたことは確かであろうと考えられる。

すみながし　　しげはる

春がすみなかしかよひぢなかりせば
秋くるかりはかへらざらまし　（巻一〇・物名・四六五）

右がその歌であり、やや理解しづらいのは、「すみなかし」の語をその意味とは無関係に取り込んで、意味の通る和歌に仕立てたためである。このような歌を物名（歌）というが、この歌が評価されるためには、墨流しというものが広く周知されていなければならないはずである。

平安時代の墨流し紙の現存例もそれなりに存しており、一二世紀初頭頃とされる国宝の「西本願寺本三十六人集」や、同世紀中頃のものと考えられる「扇面法華経冊子」などがその代表的な例である。円福寺本の模様の墨線の一本一本は繊細で、その流れ方も複雑にして優美であり、その墨流し技法自体はこれらの代表例に見劣りするものではない。

そのような墨流し紙に、金の切箔・砂子、銀の切箔・砂子・野毛箔を用いて雲霞を描き、金銀泥と緑青を用いて花の枝を描いている。花を金・葉を銀で描いたものと、その逆のものがあり、緑青で枝と葉の縁と葉脈を描いている。経年劣化もあり、この花が何であるのかの判断は難しい。目録でも「草花」とだけ記している。花だけを見ると八重桜のようにも見えるのだが、葉の形状からすると牡丹と見る方がよさそうである。

銀の酸化や緑青の剝落を割り引いて考えると、当初は相当に華やかな表紙であったものと思われる。公家筆頭の近衛家の蔵書を伝える陽明文庫に所蔵される『源氏物語』の、鎌倉中期頃の写とされる帖の原表紙を見ても、墨流し地に金銀の箔や泥で雲霞が描かれている程度であり、金銀緑青で牡丹が描かれたこ

の本は、相当な貴顕の為に誂えられたものであろうことが推察されるのである。

### ウ　外題

古写本の江戸時代に替えられた表紙には、題名を書いた題簽が貼られていることが多い。当然のことといえるが、それらの殆どは新しい表紙と共に用意されたものである。稀には比較的状態の良い原題簽を再度用いる場合もあるが、そのような事例でも題簽が室町時代を遡ることはないように思われる。それほど古い題簽が残存する例も少ないということでもあるのだが、そもそも南北朝時代以前では外題は表紙に直書きされるのが一般的であったらしいことは、藤原俊成・定家父子以来の歌書を中心とする古写本を、数多く襲蔵する冷泉家時雨亭文庫の原表紙類を確認しても明らかなことである。

この本もその例の一つであり、表紙が残存したおかげで外題の情報も伝わった幸運な事例である。目録にも表紙の説明に続けて、「その中央に「廿五　まほろし」としるした外題も、約八百年前のもとのまま」と記されている。僅か六文字でしかないが、ここから得られる情報も少なくはない。

鎌倉時代には、歌書は外題を表紙左肩に物語は中央に書くという、入墨道（書道）上の作法が存在していたことが知られている（拙稿「冊子本の外題位置をめぐって」『日本古典書誌学論』（笠間書院、二〇一六）を参照いただきたい）。この本はそれに則っていることが判るのである。そればかりではなく、注目できるのは巻名の前に「廿五」とあることである。「幻」は第四一番目の巻であるので、これは単純な巻序でないことは明らかである。『源氏物語』の巻序には古くから特殊な数え方があったことが知られている。それを示す最古の資料として知られるのが、その内容により、正治年間（一一九九～一二〇一）頃の成立と考えられている、故実書『簾中抄』の異本とされる『白造紙』に見える記述である。そこには、巻序が与えられた巻と、「ナラヒ」との記述に続けて掲げられる巻とが存している。この数を与えられない巻は「並びの巻」と呼ばれ、直前の巻序のある巻と、ほぼ同時期の別の出来事を記すものと、同じ出来事が巻を越えて続くものとがあると理解されている。この古い数え方によると、「幻」は「二十五」となるのである。

『白造紙』は高野山正智院蔵の古写本のみが知られていたが、関東大震災の折に、たまたま借り出されていた東京帝国大学国語研究室で消失してしまい、撮影されていた写真によってその

面影を忍ぶことができるのみである。ただし、『源氏物語』のこのような巻序に関する記述は、『白造紙』のみではなく、多少の違いも存するものの、この物語の最古の注釈書として知られる『源氏釈』をはじめとする、古注釈類にも存しており、鎌倉時代には広く認知されていた考え方であることは明らかである。円福寺本の外題の数字は、『源氏物語』自体の写本に存する巻序説の痕跡の最古級の資料としても、非常に貴重な存在であるのである。

外題の筆跡はどうも本文とは別筆のようである。あまり短絡的に考えるべきではないが、本文の筆跡と外題が別筆の場合は、寄合書きである可能性が高いと考えられる。『源氏物語』は五四帖と大部であるために、書物の商品化と量産化が進み、文字の上手い職人的な書写者が一人で全帖を担当することが多くなった江戸時代を除いて、室町時代以前では一筆で書写されることは稀で、複数の人物によって分担書写されることが普通のことであった。そのような場合には、清書後の製本に際して、統一感を持たせるために、表紙を揃えるのは勿論のこととして、一人の人物が全帖の外題を記すことも多かったのである。その際の外題を担当する人物は、本文の書写をも分担している全体の取りまとめ役のような者か、本文部分には関与していない、身分や学識が高い者であることが多かった。現状ではこの本がそのどちらであるのかの判断はできないものの、少ない文字数ながらも能筆であることが理解でき、外題の筆者もそれ相応の人物であったと思われるのである。

### エ　料紙

表紙や外題の筆跡などから窺われる円福寺本の格の高さは、目録にも、「極上質の鳥の子紙」・「紙面に薄く雲母を引き」とあるような料紙からも窺われることである。デジタル技術の発達により、紙を高倍率で観察することが容易になり、近時は和紙の原材料や加工の分析が普通に行われるようになってきている。円福寺本の料紙もデジタル・マイクロ・スコープで観察したところ、雁皮（がんぴ）を原料とする鳥の子紙ではなく、和紙の代表的な存在である楮紙（ちょし）を徹底的に叩いて、鳥の子紙に紙質を近づけた打紙（うちがみ）であることが明らかになった。この本に限らず、これまで鳥の子紙と指摘されてきた鎌倉時代の写本は、その殆どが打紙を用いていると考えてよさそうである。円福寺本の紙質は当時の綴葉装写本の料紙として、十分上質のものと認められるものである。しかもその上質紙の上に、透明な鉱物である雲母を

砕いて微細な粉にしたものを、糊の一種である膠（にかわ）を用いて紙一面に塗っているので、視線を動かすたびに上品にキラキラと輝くのである。平安時代には存在している装飾法ではあるものの、鎌倉期の文学作品の写本の料紙としては、比較的珍しいものであると言える。やはり料紙の面においても、この写本が格の高い存在であることが認められるのである。

### オ　書風・字体

その料紙に記された文字の特徴から判断される年代については先に確認したところであるが、ここでその書写態度についても検討しておきたい。

目録に、「書は全巻一筆、細線流るるが如き美しさで、時に女性の筆かと思われる部分も見える」とある通り、円福寺本は全体的にかなり細い線で、連綿もかなり激しく、縦の線を意識的に伸ばすよう書写されている。鋭いようでありながら、筆を回す際には特徴的な柔らかみも有しており、そのような部分が女性の筆跡かと感じさせる理由であるのかもしれない。同じく西行筆とされる天理図書館蔵の「竹河」の筆跡が、全体に曲線が少なく尖って神経質な特徴があり。男性的な印象が強いのとは好対照であるといえようか。

とはいえ、この「幻」も「竹河」も各行が真っ直ぐで、行と行の間隔もほぼ等しく、全体に整った感じであるのは共通している。平安時代の仮名が、全体的に丸みが強く、行線が傾き、行間も不揃いのものが目立つのとは明らかに異なっているのである。それでありながら、鎌倉時代的な直線の力強さや鋭さはそれほど感じられないことからしても、過渡的な特徴を示すものと言えそうである。

しかしながら、書風の判定はどうしても印象的な要素が入りがちであるし、判断が難しい事例も多い。より客観的に文字の特徴を示すものとして注目されるのは、仮名の種類であろう。

固有の文字を持たなかった日本は、表意文字である漢字の意味をひとまず無視して、それを表音文字として音読みのみならず訓読みをも用いて、日本語を文字で表記しようとした。『万葉集』で用いられた所謂「万葉仮名」がその代表的な例である。しかし基本的に画数が多い漢字で日本語を表記するのは効率的ではないことから、平安時代に至って、簡略に書くことができる漢字の草書体から、表音文字としての平仮名が成立したのである。

しかしながら、長い年月を掛けて徐々に出来上がっていった

ものなので、万葉仮名がそうであるように、音と文字が一対一対応にはなっておらず、同音を示す文字が複数存在するという、ある意味欠点とも言える大きな特徴が平仮名にはあったのである。これが基本的に一音一字に統一されたのは、明治三三年（一九〇〇）の小学校令施行規則改正の際のことである。そしてこれによって、この統一から漏れてしまった平仮名が変体仮名と呼ばれているのである。

同音の文字が沢山あるのが不便であるのは確かであり、時代が下るにつれて次第に整理されていくのも自然なことであった。鎌倉時代以降の変化はそれほど大きくないようであるが、平安時代と鎌倉時代に使用された文字数には大きな変化があるのである。

この「幻」帖は書体に平安時代の名残があるばかりではなく、使用している平仮名にも確かに平安風を認めることができる。円福寺本に見える鎌倉時代には使用されることが珍しくなる平仮名を元になった漢字と共に示すと、稿者の主観が交じった判断ではあるが以下の通りとなる。

具く・新し・志し・数す・遅ち・傳て・度と・東と・葉は・耶や・野や・羅ら・梨り・類る・累る・連れ

この他にも、「无」の草書体が「む・も・ん」音を示す文字として使用されることや、「らん」に「覧」を多用するのも、古い表記の名残と言えるであろう。

古写本を忠実に模写した場合は、平仮名の字体の古さは書写の古さの証明にはならない。また平安時代の書風が高く評価された江戸時代には、意図的に古い仮名や書体を用いた擬古的な書物も製作されたりもする。しかしこの本は、形態的なことを含めたあらゆる点において、平安時代から鎌倉時代への過渡的な特徴を有しているのであり、やはり『源氏物語』そのものの本文を伝える書物として、現存最古の部類に属するものであることは疑いないのである。

## 二、僚帖の存在

以上のように、書誌情報を確認することは、その本の性格を理解する上でも必要なのである。またそれは『源氏物語』の場合には、同時に製作された他の帖や冊を見出す上でも有用である。先述のごとく、『源氏物語』は分担書写される場合が多いので、一緒に製作された僚帖を発見するのに筆跡は必ずしも有力な手掛かりにはならない。同筆であれば話は別であるが、一

人の人物が同一作品を何度も書写した例もあるので、それのみでは断定は難しい。前近代には書物の大きさのおおよその規格はあっても、細かく規定されていたわけではないので、同一規格のものも、その寸法は微妙に異なるのが普通なのである。であるので、縦横の大きさが完全に一致することは、単なる偶然ではない可能性が高いのである。またセットの内では半葉の行数や、文字を書く縦方向の幅である字面高さを揃えることが多いので、大きさに加えてこれらまでが一致するとなると、僚帖である可能性は極めて高いことになる。しかしその重要な手掛かりとなる大きさも、表紙が付け替えられると、それに際して三方を化粧裁ちしてしまうので、微妙に小さくなってしまうものなのである。

その点でも原表紙が残存しているということは、基本的にその大きさが本来のものであることを証明しているのである。しかも、表紙には非常に多彩なものがあるので、表紙の色や装飾というものは、外題の筆跡や題簽の特徴も含めて、僚帖を探す上で極めて有力な手掛かりになる。ただし、江戸時代の装飾性の高い伝本では、一揃いの本の中で複数種類の装飾紙を混用している場合もあるので、注意は必要である。

円福寺本はこれだけ古いものではあるが、奇跡的に原表紙が残存しており、僚帖を探すのに大変条件が良いのである。そこで、主要伝本をリストアップした、池田亀鑑『源氏物語大成第七』の「現存重要諸本の解説」を確認してみると、「胡蝶装。竪五寸四分横五寸五厘枡形。表紙鳥の子厚様。墨流し、牡丹の文様があつたもののごとくであるが剝落。中央に「廿一かしはき」と打付書にする。料紙は銀引で一面十一行」と、用語や単位の違いを勘案すると、その特徴が悉く円福寺本と一致する「伝源三位頼政筆柏木巻」を見出すことができる。またそこには本文末尾部分の模写図も掲載されており、筆跡こそ同一ではないものの、その時代的な共通性の高さも認められるのである。ただし残念ながら、その所蔵者については言及はない。

そこで問題の「柏木」帖の行方を探してみると、『天理図書館善本叢書和書之部第三十巻 源氏物語諸本集二』（八木書店、一九七八）に、伝頼政筆の古写本が掲載されていることが確認できる。その影印の本文末尾部分を先の模写と比較してみても、まぎれもなく同一のものであると判断できるのである。

影印の曾澤太吉の解題には、「鎌倉時代初期写。綴葉装。金銀泥の下画墨流し表紙。見返しは金泥で雲霞を描き、更に銀箔

を砂子・芒に切って散らす。用紙は雲母引鳥の子。縦十六・四糎、横十五・三糎。外題は中央にあり「廿一　かしはき」と記す」と、書誌情報はやや簡略に記されるのみであるが、表紙部分の図版を見れば、一目でこの「柏木」が「幻」の僚帖であることが理解できるのである。

解題には言及されていないものの、影印の後遊紙部分に特徴ある「月明荘」の印を認めることができ、この「柏木」も「幻」帖と同じく弘文荘が取り扱ったことが判る。前遊紙裏の天理図書館の受入印に昭和三四年とあることからすると、池田は弘文荘でこの本を調査させてもらい、商品であることから所蔵者を明示しなかったものと考えられそうである。

共に弘文荘の商品であったとなると、旧蔵者も同じであった可能性が高いことになる。それを確認すべく両者を比較してみてまず気になるのは、見返しの違いである。「幻」が本文共紙であるのに対し、「柏木」は金銀の箔や泥で装飾した後補のものになっているのである。また「幻」にある前見返しの伝称筆者の貼紙や、裏見返しの了意の極書などは「柏木」にはないのである。そしてその替わりに、

「源氏柏木巻壹冊（墨付五十四枚　白紙十枚表紙付共ニ）（印）」

「河内守隆親朝臣（集ニ入　源氏物語柏木之巻）（印）」

との極札が二枚と、

「源氏かしは木　六半本／源三位頼政卿正筆」

との正筆書（しょうひつがき）が箱蓋裏にあると解題に記されている。正筆書は池田解説に拠れば別家の古筆了仲のものとのことであるが、極札を記した人物については現状では手掛かりがない。同一の所蔵先であったならば、このように鑑定書の形式と鑑定家が異なることは考え難い。古くは一緒に伝わっていたとしても、鑑定が加えられた江戸時代には別々に所蔵されていた可能性が高いと判断できそうである。

ここで注意しておきたいのは、この「柏木」帖の筆者について二つの鑑定が存していることである。これは特別珍しいことではなく、鑑定者の家系が異なっている場合などに折々見受けられることである。現状では頼政との鑑定の方が優先されているのであるが、武将歌人として著名な頼政は、古筆の筆者としても良く見かける人物である。『頼政集』断簡の「三井寺切」、『和漢朗詠集』断簡の「平等院切」、仏書断簡の「薄墨切」など、特別な名称を付けて尊重された別格の古筆切である「名物切」も、頼政には複数在しているのである。確実な頼政の筆跡は見

出されていないが、「三井寺切」は自筆の可能性もあると言われている。両者を比較してみると、同筆とは言えないものの、細い線での連綿が目立つなどの共通性も認められ、その鑑定の所以も推測されるのである。

これに対してもう一つの伝称筆者である「河内守隆親朝臣」は、著しく知名度の劣る人物である。「集ニ入」との注記があるのも、その無名さ故であると思われる。これは勅撰集に入集する歌人であることを示してるのだが、勅撰二十一代集には「隆親」という歌人を二人確認できる。「河内守・朝臣」とあることから、この隆親は公卿には至っていないことが判るので、第九代『新勅撰集』以下に二七首が入集している、大納言四条隆親（一二〇三～一二七九）は除外される。

残るのは第七代『千載集』に三首が入集する隆親である。この藤原隆教息隆親は、河内守の他に、播磨守・内蔵権頭などを歴任しており、承安二年（一一七二）「広田社歌合」に出詠した他、自邸で歌合をも催している一廉の歌人である。しかしながら、古筆の筆者とされている事例は他に見当たらない人物である。そうなると、何らかの根拠を基に鑑定している可能性が高いことになる。

幸いにも、隆親の筆跡は、目録にも西行の自筆資料として挙げられた、治承四年（一一八〇）末から寿永元年（一一八二）六月の間のものと考えられる「一品経和歌懐紙」の中に、「河内守隆親」と署名がある懐紙が現存している。目的や文字の大きさの違いを考慮の上で両者を比較してみると、同筆とは言えないものの、時代的な近さもあってか似通う文字なども見受けられる。どうやらこの懐紙の存在が、この鑑定に影響を与えているようなのである。

頼政・隆親と西行の三者は同時代の活動が認められ、歌人同士としての交流もあった人物である。「幻」「柏木」両帖は彼らの真筆ではないと判断されるのであるが、その鑑定にはそれなりに筋が通っていることが理解できるのである。

たとえ一帖であっても、これほどの古写本に僚帖が見いだせるのは稀有なことであり、両帖をセットとして様々な検討が行えることの学術的な価値は極めて高い。単純なことだけを挙げても、筆跡が異なることからは、この『源氏物語』が寄合書であったことが確定できるのである。またその筆跡は「柏木」帖も優美にして端正であり、共にかなりの書の名手が丁寧に書写していることからも、やはり相当な貴顕の為に誂えられた写本

であることが再確認できもするのである。

## 三、本文の性格

### ア　本文の三分類

それではこの注目すべき古写本には、どのような物語本文が保存されているのであろうか。

目録には、「書写されたテキストは確かに、定家の校訂した青表紙本、及び河内守光行・親行父子の努力に成る河内本、の両系統に先立つ古本（池田亀鑑博士の分類に従えば「別本」）の部類に属する。書写もあの両つの校訂本の完成に先立つ年代であろう。同博士の採訪細検に漏れた古写本で、「校異源氏物語」に由って本文を検討すると、いわゆる「保坂本」（当時保坂潤治翁の所蔵せられた古写の一本）に最も近く、細部まで殆ど一致する。恐らく両者は、併せて古本或いは別本中の一系統を形成するもので、博士がさらに将来を期せられた、別本系統本の分析に役立つ一新資料である」と、弘文荘の目録らしい、簡にして要を得た解説がある。新たに加えるべきことは殆どないのだが、幾分かの補足を加えつつ再説してみたい。

いくつ存在するともしれない『源氏物語』の伝本が保存している本文は、池田亀鑑によって三つに分類された。その分類方法は若干の異見も存するものの、現在にいたるまでほぼ定説となっている。

未知なる新出伝本が発見されても、この分類の基本線が揺らぐことはありえないと断言できる有能な分類であり、今後も大きな修正を加える必要はないものである。なぜならば、多くの伝本調査とその本文の検討によって、共通性の高いグループが二つ存在することと、独自性が高くグループにまとめることができない伝本も複数存在することを確認して、グループ化できないものを、その他を意味する「別本」として一纏めにする処置を行っているからである。全く未知の本文が現れても、別本に含めればよいのである。合理的にして分かりやすい分類であると言えよう。

些か問題があるとすれば、分類の方法が方法であるだけに、「別本」は常に大きな二つのグループを通してしか相対化されないということであろう。つまりどうしても異端的なイメージが付き纏い、重要視されにくい傾向があるように思われるのである。ここで円福寺本を紹介するのも、そうした問題を少しでも解消したいからでもある。

ともあれ「別本」を理解するためには、二つのグループについて知っておく必要がある。目録にも見えるように、その二つとは「青表紙本」と「河内本」である。

青表紙本は、古い由緒のある呼称ではあるものの、ある特定の伝本を指して用いられていた可能性もあり、グループの呼称として問題もあるので、現在では「定家本」との呼称が広まりつつあるようである（拙稿「二つの「定家本源氏物語」の再検討―「大島本」という窓から二種の奥入に及ぶ―」（『日本古典書誌学論』）を参照いただきたい）。この新しい呼び方にも明らかなように、「定家本」は、鎌倉初前期の歌人・古典学者として著名な藤原定家（一一六二～一二四一）が所持していた本から写し広まった伝本群を指すものである。目録には「定家が校訂した」と記されているものの、同系統の中でも多くの細かな差異は存しており、それによってある程度の細分も可能であるように、定家の所持本が複数あった問題もあり、その成立の詳細については不明な点も多い。定家の子孫の繁栄と共に、その和歌及び古典学の学統が非常な権威を有したことから、『源氏物語』の定家本は、室町時代以降に優勢になり、江戸時代には版本の底本となったこともあって、流布本の地位を占めるに至っている。現在でも基本的に定家本を用いてこの物語の研究が行われているのである。

河内本は、鎌倉幕府政所の初代別当となった源光行（一一六三～一一四四）が、嘉禎二年（一二三六）から作業を始め、その息親行が建長七年（一二五五）に一旦完成させた本文を始発とする系統である。彼らが目にすることができた二一本の伝本を校合して作成された校訂本文であり、この父子が共に河内守であったことからこの名称がある。室町時代前期頃までは勢力があったが、次第に定家本に取って代わられた。江戸時代に刊行されることもなかったので、影響力は定家本には劣るが、確かな一群をなすものであり、定家本や別本を相対化するためにも重要な系統である。

そして問題の別本であるが、池田は『源氏物語大成第七』第二部第五章「別本の呼称とその性格」において、「極めて便宜的な用語であつて、青表紙本でもなく河内本でもないと認められる諸本を、系統分別など考慮に入れず悉く一様に「別本」の呼称において扱つたわけである。従つて「別本」なる容器の中には、系統の明らかでない種々様々の孤立した伝本が、何の秩序もなく雑然と詰め込まれてゐるわけである。上品な喩ではないが、屑屋の籠のやうなものである」と説明している。「屑屋

の籠」にはマイナスなイメージを感じずにはいられないが、池田は続けて、「これは後で分類・整理されることを必要とする。それが「別本」なる呼称のもつ雑多性である。従つて別本は必ず整理されなければならない」と力説しているのである。

そして、続く「別本の種類」において、その分類も試みている。

一、河内本成立以前の古伝本である場合。

二、河内本成立以後の混成本文を有する伝本である場合。

イ、青表紙本と河内本との混成

ロ、青表紙本と古伝本との混成

ウ、河内本と古伝本との混成

三、註釈的意図によつて取扱はれた本文である場合。

四、絵詞・古註釈・古系図等に摘要引渉されて残存する本文である場合。

池田は純粋な伝本ばかりではなく、部分的に引用された本文にまで目配りしているのである。それはともかく、この「幻」帖は一に該当することは言うまでもない。確実に定家本・河内本登場以前の古態を知ることができ、両系統の本文を検討する上でも大きな価値を有しているのであり、「別本中の別本」とも言うべき貴重な存在なのである。

また池田はそれに続く「別本の性格」で、別本の主要な性格を七項目挙げている。その中に、

一、別本は青表紙本・河内本の形態・性格確立後に明らかになるべきこと。

とあるのは、池田分類の性質上致し方ないことではあるが、こうした認識が、別本研究を遅れさせている大きな要因の一つになっていることは否めない事実であろう。池田の指摘は勿論誤りではないが、両系統登場以前の伝本は、無条件にその古さの価値を尊重して、真正面から研究されるべきではないだろうか。『古今和歌集』や『伊勢物語』等でも同様であるが、鎌倉初期までこの物語の受容史を考えるのに、古写本の本文に注意を払わず、「定家本」しか利用しないことは、研究の可能性に自ら制約を課しているようなものなのである。また、

三、別本には誤脱・錯簡のために、意味の通じにくいものが存すること。

という項目も確かに事実ではある。それ故に河内本のような校訂本文が作成されるにいたるのであるが、そうした負の方向の評価ばかりがされているのには納得できないものがある。別本には、両系統には見えない本文の特徴も数多く存しており、そ

れらの中には研究上に有意義なものも少なくないのである。そうした価値を見出す方向で、特に書写の古い別本を中心として本格的な検討が行われるべきであろう。それは別本を「いわば秘密の函であり、これを明らかにすることこそ、最大の急務といはなければならない」と、節の末尾近くで記した池田の望んだことでもあるのである。

### イ　保坂本について

円福寺本の本文に関する情報として注目すべきは、先にも引用した目録記事の、「いわゆる「保坂本」（当時保坂潤治翁の所蔵せられた古写の一本）に最も近く、細部まで殆ど一致する」との記述であろう。一匹狼的な伝本が多い中にあって、残存帖数の多い保坂本の当該帖と、本文が極めて近いという事実は、目録に言う通り、「恐らく両者は、併せて古本或いは別本中の一系統を形成するもので、博士がさらに将来を期せられた、別本系統本の分析に役立つ」ものであることは疑いないのである。

この保坂本との関係を含めて、円福寺本の別本中の位置について確認したい。先ずは保坂本を簡単に紹介しておくこととする。

保坂本は、現在の新潟県上越市の大地主で、地元財界で活躍し貴族院議員でもあり、古文書・古典籍のコレクターとしても著名であった、保坂潤治（一八七五～一九六三、正しくは保阪であるようだが、保坂で通っているので、本稿でもこのままとする）が所蔵していたことから、文化庁蔵・東京国立博物館保管となった現在も、その通称で呼ばれている重要文化財の『源氏物語』の古写本である。

Ｗｅｂサイトの「ｅ国宝 国立博物館所蔵 国宝・重要文化財」で、「重要文化財 源氏物語」として画像が公開されている他、伊井春樹編『保坂本源氏物語』一二巻（おうふう、一九九五～七）として影印が出版されている。その第一二巻別冊二の伊井春樹「保坂本源氏物語（東京国立博物館蔵）の伝来と書誌」等を参考にして、この本の概要を整理すると次のようになる。

桑名藩主松平定信旧蔵と伝えられる、「浮舟」を欠く五三帖の本で、昭和一一年に国宝に指定され、戦後に旧国宝として重要文化財となっている。その国宝通知書に「内十七帖補写」とあるように、「桐壺」から「絵合」までの一七帖は室町中期頃の定家本系の補写であり、「松風」以降が鎌倉中期頃の書写とみられるものである。その古写三六帖の内訳は、別本二五帖、河内本七帖、定家本四帖からなっているという。

三六帖に属する問題の「幻」帖は、墨流し地金銀砂子散し表

紙（一六・五×一五・〇糎）の綴葉装で、表紙中央に本文別筆で「廿五まほろし」と外題がある。四折で墨付二八丁、遊紙は前一丁・後三丁、半葉一〇行書である。

また円福寺本ほどには目立たないが、「四し・新し・難な・日ひ」など、鎌倉期になると次第に用いられなくなる古い仮名表記も散見され、本文の古さを感じさせられるのである。

円福寺本と保坂本の本文を比較すると、確かに高い共通性を有していることが確認できる。しかしながら、両者には書写の形式や仮名遣いなどには違いがあり、直接的な書承関係はないものと判断できるのである。

円福寺本は、半葉一一行書きで墨付三〇丁であるが、保坂本は半葉一〇行書きであるにも拘わらず墨付は二八丁と僅かに少ない。これは、円福寺本の初行が一三字であるのに対し、保坂本が一七字であることが示すように、保坂本は字粒を小さく書写しているからである。そのために円福寺本が比較的ゆったりと書写しているのに対し、保坂本はかなり窮屈な印象がある。

また和歌を書く際には、円福寺本では先述のごとく二字下げで書き始め、成り行きで改行し、二行目は行頭から始めて、そのまま地の文が続くのに対し、保坂本は、二字下げで書き始めて上句末で改行し、下句も二字下げにして、歌が終わるとまた改行するという形式を採っている。保坂本の形式は、和歌の独立性が高い表記法と言えるが、この物語では珍しい形式である。この差異が生じた理由としては、セット内で書式を揃えるために、とある段階で手が加えられたことが考えられよう。ただし、保坂本の古写帖でも、和歌の書式が円福寺本と共通するものもあることは注記しておきたい。

また書式のみではなく、例えば円福寺本が冒頭が「はるのひかりを」で始まるのに対し、保坂本は「春のひかりを」としていることにも明らかなように、保坂本は表記の仕方まで忠実に受け継いでいる訳でもない。この事例とは逆になるが、円福寺本の方が保坂本よりも漢字表記が多いのである。古い写本ほど漢字が少ない傾向が強いことからすると、比較的漢字が多いことは円福寺本の傾向に加えることができそうである。

また両者の違いで目立つのは、仮名遣いと音便表記の違いである。「お（ほ）・を」・「は・わ」・「ひ（い）・ゐ」・「え（へ）・ゑ」などの仮名遣いの違いは、半葉に一、二箇所は存している。音便については、保坂本では全般的にウ音便表記が目立ち、円福寺本で「たまひて」とあるものが、「たまて」とウ音便無表

記の形で記している。

### ウ　両本の共通性

こうした小さな異同を超えて、両者が緊密な関係にあることは確かである。『源氏物語』の幾つかの帖では、最末部分に異同が存していることが知られている。最も著名なのは「柏木」の巻で、末尾が端的に系統を判断する指標として用いられているほどである。「幻」も巻末部分の違いが小さくないものとして、注目できる帖なのである。

定家本は、「なにとなくおほしまうけてとそ」（定家本の引用は『源氏物語大成』校異編の大島本翻刻に拠る）で終わるのが普通で、「なにとなう」と音便化しているものもあるが大きな差ではない。河内本も音便化した「なとになうおほしまうけてとそ」の形であり、この部分で両者は一応識別できる。

ところが別本はより複雑な様相を示している。『源氏物語大成』校異編および、新しい伝本を加えて、定家本の校異と同水準の細かな異同まで示してある、加藤洋介氏の「源氏物語校異集成（稿）」（ここでは大成で「御物本」と呼ばれる東山御文庫蔵本を「各筆本」と呼び変えているが、本稿では「御物本」のままとする）を参照すると次のようになる。

おほしまうけてとそ　陽明文庫本
になくとおほしまうけてとそ　飯島本
いとになくおほしをきてゝなとそはへめる　御物本
いとになうおほしまうけてとそ　中山家本
いとになくおほしまうくとなん　保坂本

定家本に一致する伝本も存するものの、この情況を見れば別本が類ではないことも良く理解できるであろう。そして円福寺本は保坂本と全く一致しているのである。

この他の注目できる事例として、定家本と河内本では「ありけるかな」とある（大成一四〇六頁四行目）箇所が、別本では数行程度の異文が続く箇所が挙げられよう。

保坂本のこの部分は、

ありける／かなよのことはりもふかくしらすたゝと／きにあたりておもふ事なくすくしつへか／りしとしのほとよりかなしと（五丁表）

となっている。円福寺本の当該部分は、

ありけるかな世の」ことはりもふかくしらすたゝ時にあ／たりて思ことなくすくしつへかり／しとしのほとよりかなしと（五丁表・裏）

であり、漢字仮名の宛て方に違いはあるものの全く同文なのである。煩瑣でもあるので具体的には示さないが、他の別本も細かな異同はありながらもこの部分は存しいる。定家・河内両系統では知ることのできない、鎌倉初期迄遡ることのできる古い本文を別本に見いだすこともできるのである。別本を「その他」と見下してはならないことは、この例でもあきらかであろう。

また定家・河内両本で「池のはちすのさかりなるをみ給にいかにおほかるなとまつおほしいでらるゝ」（一四一八頁四～五行目）とある箇所を、円福寺本は、「いけのはちすさかりなるを見たまふにつけてもいかてなみたのとおほさる」（二二丁裏七～九行目）としている。保坂本は、最初に「いかてなみたの」とあったものを、「て」に「に」を重ね書きし、「なみたの」に見せ消ち記号を付して、「いかにと」と改めている（二一丁表）。

青表紙本などの「いかにおほかる」は、「かなしさそまさりにまさる人の身にいかにおほかる涙なるらん」という和歌の一部を引用したと考えられる部分である。この様な物語本文に一部が引用された歌を「引歌」と呼ぶが、この引歌は、『源氏物語』の最古の注釈書である、平安末期に成立した藤原伊行（一一三九？～一一七五？）の『源氏釈』にも指摘されているもので、『伊勢集』や『古今和歌六帖』に見える歌である。

ところが「いかてなみたの」では、当然この伊勢歌は引歌にはならないのである。そこでこの部分を有する『源氏物語』成立以前の歌を探してみると、『元輔集』「しる人もなくてやみぬるあふことをいかで涙の袖にもるらん」（二三三、和歌の引用と歌番号は『新編国歌大観』に拠る）や、『和泉集』「うらむべきかただに今はなきものをいかで涙の身に残りけん」（五七二）、「何事も心にしめてしのぶるにいかで涙のまづしりにけん」（七〇〇）、などを見つけることができる。この中では、詞書に「ものおもひつづくるに、かなしければ」とある、最後の歌が一番相応しいようではあるが、今は失われた古歌を踏まえた可能性もあり、断定は難しい。ともかくも、定家本などとは全く異なる歌を引いているらしいことは確かなのである。

保坂本は定家本などの形に改めようとして、「おほかる」を補入し忘れたということなのであろうか。別本では陽明文庫本もこの部分は一致している。『源氏釈』が引用しているのであるから、定家本のような本文が平安末期に存していたことも確かではあるものの、円福寺本は定家本・河内本成立以前の書写であるだけに、この様な小さな異同も無視できないものであろう。

### エ　両本の異同

円福寺本と保坂本の間には注目すべき異同も存している。その中でも注意されるのは、定家本で「なか比ものうらめしうおほしたるけしき」（一四〇四頁五・六行目）とある部分である。ここを保坂本は、「なかころはものうらめしうおほしたるけしき」（二丁裏）とする。漢字仮名の違いを無視すれば、「ころ」の後に「は」が続く点のみが異なっている。ところが、円福寺本では「中ころは物ゑし、たまへるけしき」（二丁裏八・九行目）とあり、かなりの違いがあるのである。「物ゑし」は一見すると意味不明なようではあるが、別本の中でも本文が近いことで有名である麦生本と阿里莫本に、「物ゑんしし給ける」という本文が確認できることからも判るように、これは「物怨（ものゑん）じ」の撥音が無表記になった形であると理解できるのである。

何故円福寺本と保坂本がこの様に異なるのかは重要な問題である。保坂本の当該部分を注意して見てみると、影印でもインターネットの画像でも、「ものうらめしうおほした」の部分は、元の文字を擦り消して書き改めていることが、墨色や紙の荒れ具合などから判明する。その訂正時期は判然としないが、円福寺本と同文であった本文を、定家本のような本文を参照して改めたものと一応は考えられるのである。

伊井氏の保坂本全体の解説にも、「他本による校合書入れや訂正が数多い」との指摘があるように、この部分もその一例と言えるであろう。

そうした他本との接触がはっきりするのが、保坂本六丁裏の二箇所の異本注記である。定家本で「後はそのかたにはあらす人より」（一四〇七頁三行目）とある部分が、保坂本では「のちは人より」と本行にあり、「は」の後に小さな丸の補入記号をつけて、その右傍に異筆小字で「そのかたにはあらてイ」と書き加えている。円福寺本は言うまでもなく、保坂本の最初の形と同じである（七丁表一行目）。

また保坂本はそれに続く、「給へりしかたさまにも」とある部分の「かたさまにも」の左側に抹消を意味する見せ消ち記号を付けて、右傍に前行の補入と同筆で、「物をとおほしいつるにかの御かたみのイ」と書き入れてもいる。これだと続く「御かたみの」が重複してしまうのだが、それは補入の際の不手際であろう。ここは定家本では「給へりしかたさまにもかの御かたみの」（一四〇七頁四行目）と保坂本の本行と同じ形であり、

円福寺本もそれと異同はない。

ここを「おほしたりし物をとおほしいつるにつけて御かたみの」とする、定家本の鎌倉写の池田本と室町期写の一群があり、別本でも陽明文庫本と飯島本がこれに一致している。保坂本は「給へりし」の部分には手を入れてないので、これらと完全な同文にはならないのであるが、これらのような本文を有したらしい伝本と接触していることが認められるのである。

また異本注記ではないのだが、保坂本では一一丁表で「はるのさかりに心を」とある個所の、「のさかり」に見せ消ち記号が付されている。円福寺本は消さない形で一致している。ここは定家・河内や別本の多くのが「春に心を」（一四一〇頁一〇行目）であり、そちらの形に訂正しているのである。

さらに同本は一二丁裏でも、「かれはことさまにこそゆゑをもよしをももてつけたまへりしかと」とある部分で、「かれはことさまに」と最初の「をも」に見せ消ち記号を付けて、「こそゆゑよしをももてつけたまへりしかと」訂正している。円福寺本は記号のない形で一致している。定家本はここは「かれはさまことにこそゆへよしをももてなし給へりしかと」（一四一一頁一〇・一一行目）とあり、訂正後でも一致しないのである。ただし定家本中の池田本と室町期写本の多くは、「かれはさまことに」を有しておらず、続く部分で一致はしないものの、やはりこうした本文を有する伝本との接触が想定できるのである。

このように保坂本は、系統を絞り込むのは難しいものの、定家本中でも流布本的地位を占めている物や河内本ではない伝本と、ある程度の校合や校訂がなされていることは確かである。そのあり様を判断する際に、本来の形を伝えていると考えられる円福寺本が有力な手掛かりになるのである。と言うよりも、書写の古い円福寺本をこそ基本にして、保坂本のそうした性格を勘案しつつ、別本の本文を考えるべきなのであろう。

保坂本は比較的丁寧な書写であると見えるが、全体に小さな補入が目立っている。それらの書き加えられたものの殆どは、円福寺本と同文であるので、単純な書き落としであろうと判断できる。このような補入の多さは、同時期の勅撰集などの写本では見かけられないものであり、物語を書写することの難しさ、あるいは物語を書写する際の集中力がどの程度のものだったかについて考えさせられるのである。

### オ　円福寺本の補入について

円福寺本においても、小さな補入は少なくない。それらのほ

とんどは保坂本では同文で本行にあるので、単純な書き落としを補ったものと判断できるのである。ただそれらの中には理由が不明であるが、補入が片仮名書きのものもあり注意される。

円福寺本の補入には少数ながら、保坂本の本行に見いだせないものも存している。定家本で「尺定のこゑ〳〵なと」（一四二二頁四行目）とある箇所は、円福寺本では「錫杖（シヤウチヤウ）のこゑなとも」（二八丁裏九行目）とあり、その直前に「よふかき」との同筆の補入が存しているのである。この部分を本行で有しているものに御物本と中山本があり、円福寺本の親本に存していても不思議ではないと言える。保坂本の書き落としとみるべきなのであろうか。

円福寺本には数文字の見せ消ちも目立つのだが、それら消された文字は保坂本には見えないものであり、やはり本来的なものであったとは考え難い。やや急いで書写した際に、続く文章を勢い余ってという感じで憶測で書いてしまい、慌てて訂正したというところなのであろうか。やはり勅撰和歌集の清書などとは、書写時の集中力に差があるように感じられてならないのである。

それはともかくとして、円福寺本には大きな補入も二つ存しているので、念のためにその様子を確認しておきたい。

一つ目は、一丁裏一一行目「にほひなり女はうなとも」とある部分の、「女」の前に補入記号を加えて、右傍に「御あそひもなくれいにかはれることおほかり」と書き加えた箇所である。

保坂本はこの部分は本行にあるものの、「かはれる」の部分は「かはりたる」となっており、完全には一致しない。「かはりたる」は定家・河内両系統を初め別本の中にもみられる形であり、「かはれる」とあるものは別本の飯島本のみである。ここも書き落としであるとすると、補入の直前と、補入文の末尾の文字が共に「り」であるので、目移りしてしまった可能性が高そうでもある。そうなると、保坂本の異同の原因がより問題になってくる。先に確認したような校合本の影響も考えたくなるが、保坂本の円福寺本との小さな異同の内で、意味的に大きな違いが生じないものには、同文が他本で確認できないものも少なくなく、書写時の不注意で生じた誤写である可能性もありそうではある。

もう一つは、二三丁表六行目「こゑかな夕殿（セキテン）蛍飛（ニホタルトビテ）とれいの」とある「かな」の後に補入記号を加えて、「蛍のいとおほくとひかふを」を右傍に記している箇所である。

ここでも補入部分は保坂本では本行に存しており、本文の異同もない。ただしこの部分は諸本で細かな差異のある個所で、定家・河内両系や別本のいくつかは末尾が「とひかふも」とあって、「とひかふを」であるのは保坂本の他には麦生・阿里莫両本のみである。円福寺本の単なる書き落としと判断してよさそうではあるが、和歌に続く部分であるので、何故書き落としたのかやや気になるところである。次に漢詩句の引用が来るので、意識がそちらに移ったためであるのかもしれない。

また円福寺本の本文には、保坂本とも一致しない数文字の独自異文が極少数ながら存している。それらは円福寺本の誤写でありそうだが、その存在は円福寺本が保坂本の直接の親本たりえないことの証左ともなるのである。次の例はその典型例と言えようか。

夏の御方（花散里）からの贈歌に対する源氏の返歌は、定家本では、「は衣のうすきにかはるけふよりはうつ蟬の世そいとゝかなしき」（一四一五頁一行目）とあるのだが、円福寺本では初句が「さころもの」（一八丁表三行目）とある。御物本は初二句が「ぬきかふるうすゝみころも」とあり、大幅に異なっているが、他の伝本は保坂本を含めて「は」で始まっているのである。和歌表現的にも「空蟬」に対応するのは「羽衣」であるので、ここは円福寺本の誤写とみて良いように思われるのである。

円福寺本ほどの高級な料紙で能筆な筆者が書写したものであっても、補入や見せ消ち他の瑕瑾は少なくないのである。それ故に、保坂本のような近似する本文を有する伝本が存しているということは、まさに僥倖といえるのである。

## 四、第三の伝本

僅かに両者の本文比較を行っただけではあるが、その検討は各々の本文の性格の一端を明らかにしたのみではなく、書写の新しい保坂本が円福寺本を親本とするものではないことを確定し、その間をつなぐ伝本の存在をも間接的に証明することになった。鎌倉期には「円福寺本系」とも呼びうる本文がそれなりに流通していたことが確認できたのであり、別本研究において重要な事実と言えるであろう。その広がりをよりはっきりと確認するためには、さらなる伝本の博捜をすべきことは勿論であるが、「幻」帖の古筆切の中から同系の本文を有するものを探してみることが、一番可能性も高く効率的な方法であると思われる。

そこで国文学研究資料館の「古筆切所収情報データベース」

などを活用して、別本の本文を有する「幻」帖の断簡を探すと、同じく伝西行筆とされる四葉を見いだすことができる。これらは何れも高さ一六・一、二糎であり、微妙な違和感を感じるものもあるが、一応同筆と認められ、同一の本から切り出されたツレであると判断できるものである。最大のものは一〇行であり、もとは半葉一〇行であったと考えられる。和歌を二首確認できるのだが、それらは、一～一・五字程度下げて書き始め、二行目は行頭から書き、歌が終わると改行して地の文を書くという、円福寺・保坂両本とも異なる書式を有している。内一首は上句の終わりで改行されているが、これは偶然そうなった可能性もあろうか。

この四葉には、円福寺本や保坂本と同様に、「葉は・日ひ・无も・類る」などの、鎌倉期としては珍しい仮名が見えており、古い本文を伝えていることが期待できるのである。以下に通し番号を付してそれぞれを翻刻し（引用文の末尾に大成と円福寺本の当該頁数・丁数と行数を示しておく）、両帖との本文の比較を行ってみたい。

①は、『徳川黎明会叢書 古筆手鑑篇四』（思文閣出版、一九八九）に収載される、古筆手鑑『集古帖』の「五三」で、無印の極札に「西行法師 うきよに」と記されている。

うきよにはゆき、えなんと思
つ、おもひのほかにわれそほとふる
れいのまきらはしには御てうつ

（一四〇五頁八・九行目、四丁表一一行目～同裏二行目）

円福寺・保坂両本と全く異同はない。この部分は陽明文庫本も同文なので、別本としての系統は不明である。

②は、『古筆学大成二三』に伝西行筆（二）として掲げられた二葉の内の「一〇七」である。印や署名のない札に「西行法師真蹟」とあるとのことである。

をみたてまつるひと〳〵はましてせき
と、めんかたなしさてうちすてら
れたてまつらんうれはしさをうち
いてむとおもへはむせかへりつ、やみ
ぬかくてのみ思ひあかしたまへる

（一四〇六頁一〇～一三行目、六丁表八行目～六丁裏二行目）

うさうしからんさとにしのひてい
てゝみるもあれかしなとのたま
ふ中将のきみひんかしおもてに
（一四一四頁一四行目～一四一五頁四行目、一八丁表二～一〇行目）

四行目「おもへは」は両本は「おもへと」である。「は」はやや曖昧な書き方で気になるところである。この部分を含む「うちいてむとおもへ」と次行の「かくて」は、問題の両本のみと一致していることからしても、「は」は「と」の書き損じである可能性が高そうである。また三行目の「らん」は保坂本では「りなん」とあって、円福寺本の方により近いことが認められるのである。「りなん」は円福寺本のように二文字文の長さで書かれた「覧」から生まれた可能性も考えられようか。

③は、大成で「一〇八」とされたもので、四代神田道伴の極札を有するという。

御かへり
さころ(も)のうすきにかはるけふよりは
うつせみのよそいとゝかなしき
まつりの日なといとつれ〳〵にてけふ
のものみるひと〳〵心ちよけなら
むやところ〳〵のありさまなと
おほしやらる女房なといかにさ

円福寺本のみの独自異文であると思われた、「さころもの」の本文を有する注目すべき切である。この他でも、四行目「こゝちよけならんや」は両本とのみ一致するものである。

④は、久曾神昇編『源氏物語断簡集成』（汲古書院、二〇〇〇）に「第一部五二」として収められているもので、代数を特定しがたいものの、三枚目と同じく神田家の極札の存するものである。

ちかうさふらふ人々は御ほいとけ
たまふへき御けしきとみたてまつる
まゝにとしのくれゆくも心ほそく
かなしとおもふをちとまりてか
たわなりぬへきひとの御ふみとも
（一四二〇頁一二～一四行目、二六丁裏一～六行目）

音便表記の違いを除けば、両本と同文である。両本に共通する独自本文がない部分なので、判断がやや難しいが、他に完全に一致する別本は見いだせない。

以上のように、四葉併せても二丁分にも満たない量の本文しか確認できないにも拘わらず、その本文の特徴はこの両本、特に円福寺本と極めて高い一致を示しており、切断前の一帖がこの両本とほぼ共通する本文を有していたものと、断定しても差し支えないものと判断できるのである。

これにより、共通性の極めて高い本文を有する鎌倉期の写本が三本はあることが確認できた。古筆切については明確ではないものの、この三本の本文や書式の比較によって、これらは互いに直接的な書承関係はないものと判断されるのである。となれば、これらを繋ぐ存在となった伝本があったと推定できることになる。

「幻」帖に限定されるものではあるが、この鎌倉期に相応に流布していた本文として、別本の中に「円福寺本系」を特立することは許されるのではないだろうか。

円福寺本と保坂本の「幻」二帖が同系統の本文を有しているとなると、当然円福寺本の僚帖であった天理本「柏木」帖と保坂本の同帖の関係も同様ではないかと期待されるのは当然のことである。加藤氏「源氏物語校異集成（稿）」の別本「柏木」では、保坂本と共に、天理本が伝頼政筆ということで、「頼」の略号で加えられており、簡便にその距離を把握することができる。

これを見ると、円福寺本と保坂本との関係に等しく、やはり音便については差があるものの、その他の部分では一致率が高いことがたちどころに理解できるのである。「柏木」両本の具体的な比較検討と、その結果の「幻」帖のありかたとの比較については、今後の課題とさせていただきたい。これらの考察は、保坂本の他の別本帖の研究にも資することがあるものと期待されるのである。

## おわりに

僅かに一帖が残存するだけでも、それが古写本であるならば、その研究的な価値は極めて大きなものであり、そこから得られる情報が如何に膨大で、新たに生じる課題も多いことを理解いただけたものと思う。

もちろんこれまでも別本の研究がなされてこなかった訳ではなく、影印や翻刻が公開されている伝本も少なくなく、源氏物語別本集成刊行会編『源氏物語別本集成』一五巻・続七巻（おうふう、一九八八～二〇一〇）のような労作も存している。また別本研究の現在と今後の展望をまとめた近時のものに、中村一夫氏「別本研究の現在／今後」（『新時代への源氏学7』竹林舎、二〇一五）があり、様々な角度から別本がより研究されるべきことが述べられているのである。

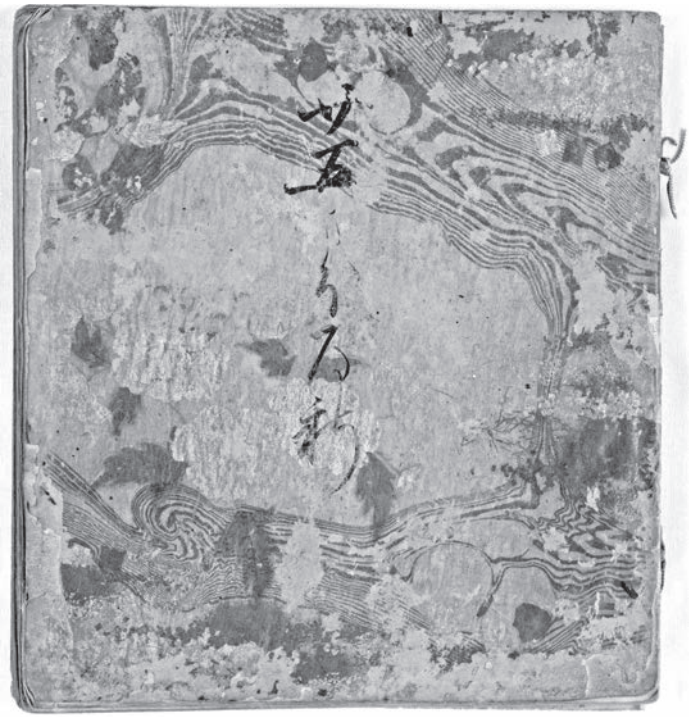
また保坂本に関しても、やはり中村一夫氏に、「保坂本源氏物語の本文の一性格―朝顔巻の別本をめぐって―」『本文研究考証・情報・資料 第一集』（和泉書院、一九九六）、「保坂本源氏物語の本文と方法―早蕨巻における独自異文を中心にして―」『同第六集』（同、二〇〇四）などがあり（『源氏物語の本文と表現』（おうふう、二〇〇四）所収）、ある程度は研究の蓄積も存しているのである。

しかしながら、『源氏物語』全体の研究を見渡してみると、別本の研究は活発であるとは言いがたいのが実状ではないだろうか。先にも記したように、青表紙・河内両本の存在によって相対化される存在であるという、別本の認識を一先ず忘れて、この両系統に先立つ古写伝本の本文を、平安時代の名残を伝える本文として先入観なしで読んでみるということも、必要なのではないだろうか。その一助となることを願って、注目すべき古写本を紹介させていただいた次第である。

稿者は日本古典書誌学と中世和歌を専門とするものであり、『源氏物語』に関する論文も複数執筆してきてはいるものの、それらは本稿を含めて書誌学者の立場から考察を行ったものである。『源氏物語』そのものの研究者ではないために、先行研究への目配りも足らず、見当違いな見解も多々述べていることを怖れるが、その点はこの影印と翻刻の利用者の方に、補訂いただけることを希望したい。

最後に改めて、この文字通りの寺宝である『源氏物語』「幻」帖の価値を見抜いて購われた、飯沼山圓福寺の先々代の御住職故平幡照政師と、書物を大切にする精神をも受け継がれて、この本を大切に護り伝えられ、この度ここにその影印と翻刻を許可下さった、現御住職平幡照正師に篤く御礼を申し上げたい。

飯沼山圓福寺蔵　伝西行筆「幻」　影印・翻刻



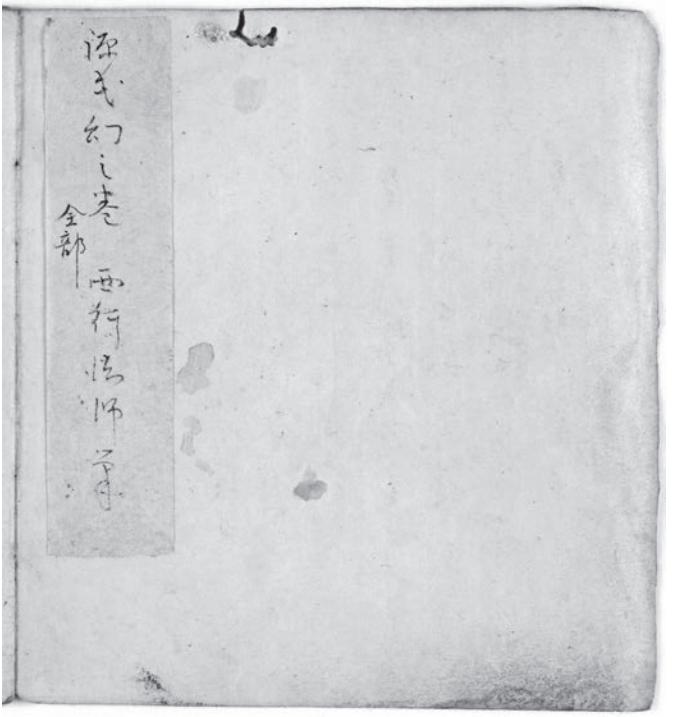
（表紙）

## 凡例

・上段に半葉毎の影印、下段に当該部分の翻刻を配し、研究の便を考えて、翻刻には丁数と行数、『源氏物語大成』の頁数・行数を示してある。

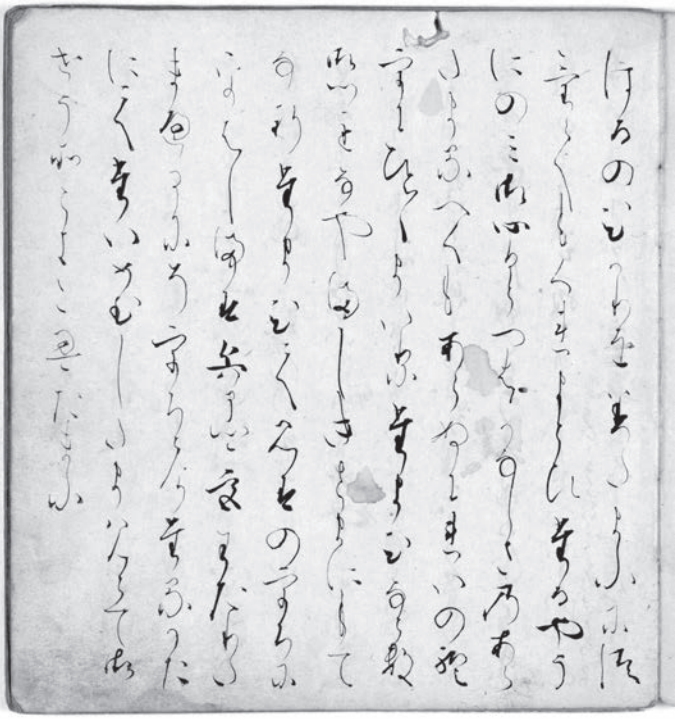
・翻刻に際しては、改行は底本通りとし、見せ消ち訂正、補入・傍書の類は、状態が判る様に示した。

・文字は通行の字体に改めた。「无」を字母とする仮名については、意味により「む」・「も」・「ん」に改めた。



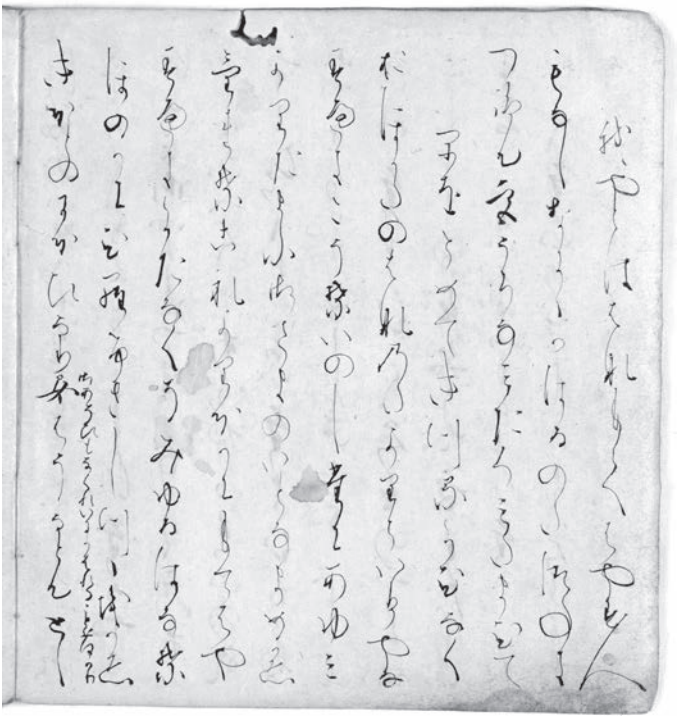
外題「廿五〔ま〕ほろし」

（前見返し）



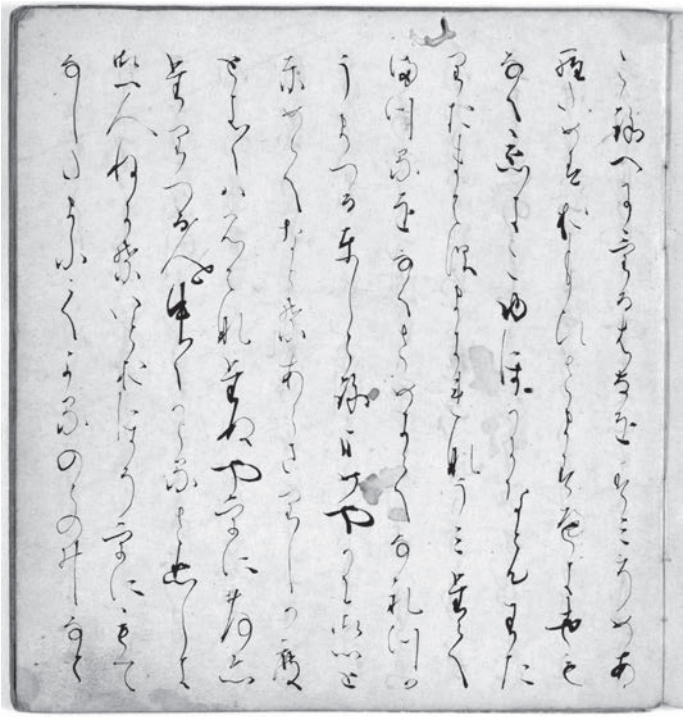
（一オ、一四〇三・1～5）

1 はるのひかりをみたまふにつ
2 けてもくれまとひたるやう
3 にのみ御心ひとつはかなしさのあら
4 たまるへくもあらぬにれいのや
5 うにひと〳〵まいりたまひなとす
6 御心ちなやましきさまにもて
7 なしたまひてみすのうちに
8 をはします兵部卿宮わたりた
9 まへるにそうちとけたるかた
10 にてたいめむしたまはんとて御
11 せうそこきこえたまふ



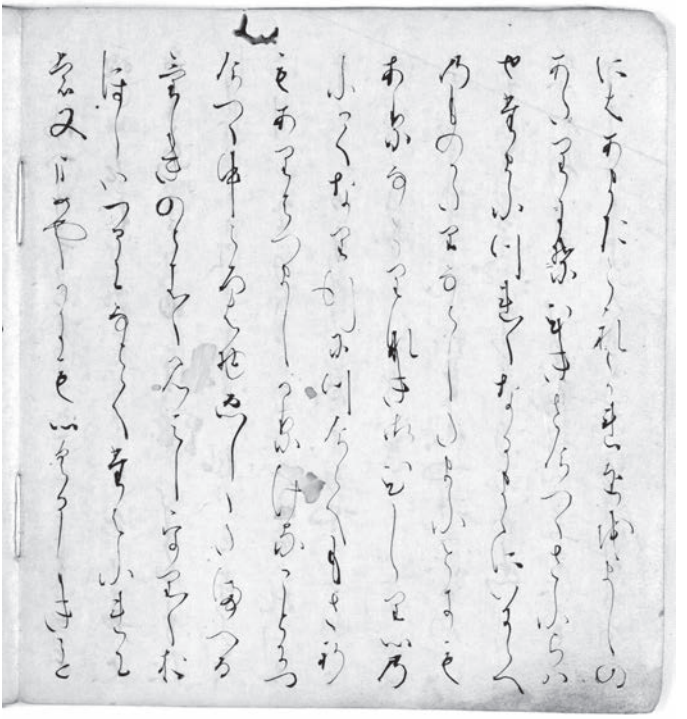
（一ウ、一四〇三・6～11）

1　我やとははなもてはやす人
2　もなしなに、かはるのたつねき
3　つ覧宮うちなみたくみたまひて
4　　かをとめてきつるかひなく
5　おほかたのはなのたよりといひやな
6　すへきこうはいのしたにあゆみ
7　よりたまふ御さまのいとなまめかし
8　けれはこれよりほかにもてはや
9　すへきかたなくそみゆるはなは
10　ほのかにひらけさしつ、をかし
　　御あそひもなくれいにかはれることおほかり
11　きほとのにほひなり○女はうなともとし



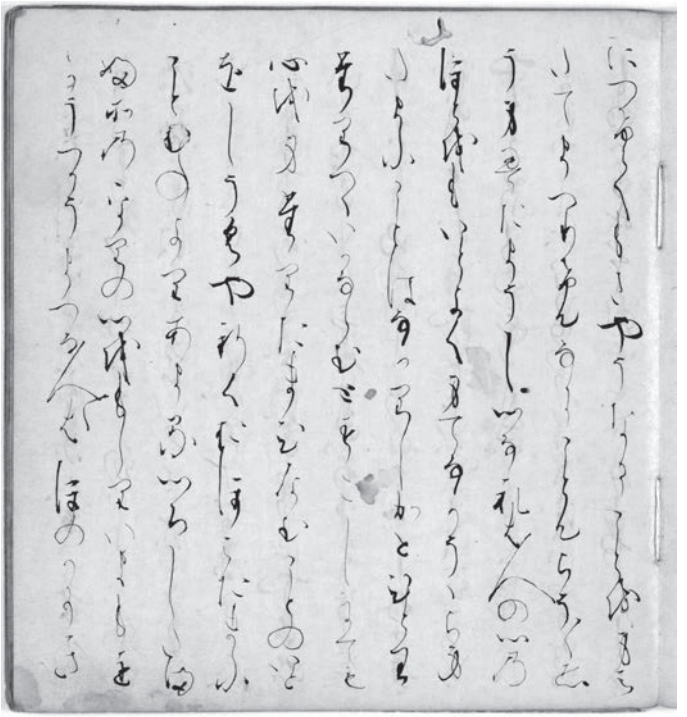
（二オ、一四〇三・11〜四・2）

1 ころへにけるはなをすみそめあ
2 らためすおもひさますへき世も
3 なく恋きこゆほかになともわた
4 りたまはすまきれなうみたて
5 まつるをなくさめにてなれつか
6 うまつるとしころまめやかに御心と
7 とめてなとはあらさりしかと
8 とき〳〵はみはなたぬやうにおほし
9 たりつる人々中〳〵かゝるさひしき
10 御一人ねにはいとおほそうにもて
11 なしたまふてよるのとのゐなと



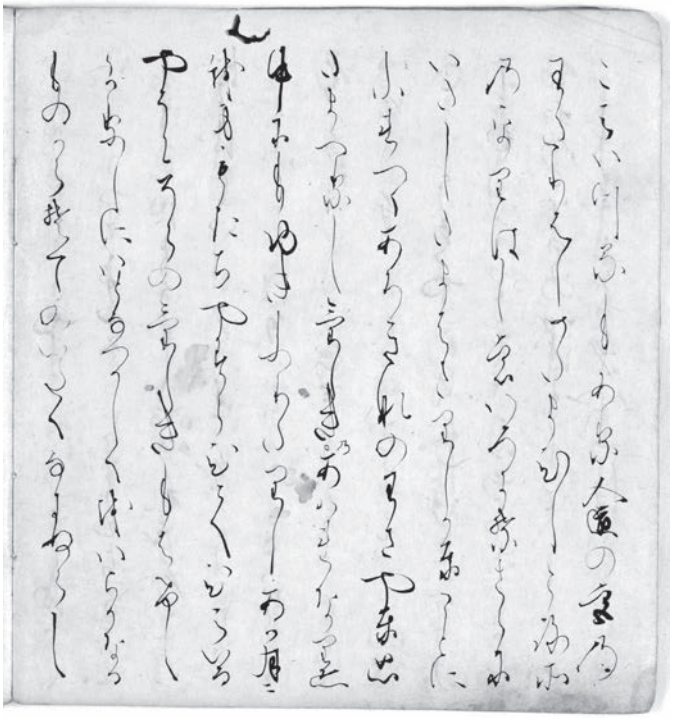
（二ウ、一四〇四・3～7）

1 にはあまたこれかれををましの
2 あたりにはひきさけつゝさふらは
3 せたまふつれ〳〵なるまゝにいにしへ
4 のものかたりなとしたまふときも
5 ありなこりなき御ひしり心の
6 ふかくなり行につけてもさし
7 もありはつましかりけることにつ
8 けつゝ中ころは物ゑしゝたまへる
9 けしきのとき〳〵見えしをり〳〵お
10 ほしいつるになとてたはふれに
11 も又まめやかにも心くるしきこと



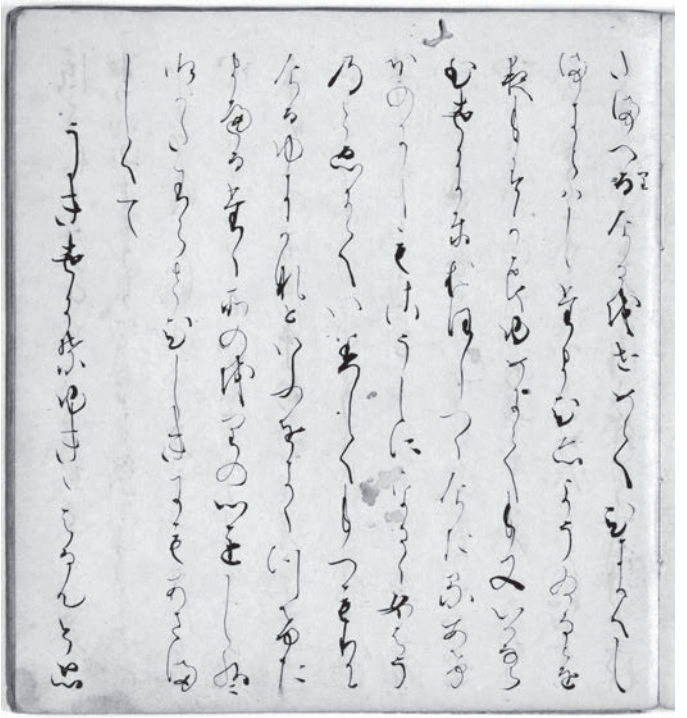
（三オ、一四〇四・7～13）

1 につけてもさやうなることをみえ
2 たてまつりけんなにこともらう〳〵し
3 うみえたまうし心なれは人の心の
4 ほとをもいとよくみてなかうゝらみ
5 たまふことはなかりしかとひとわ
6 たりつゝいかならむとすこしにても
7 心をみたりたまひけむことのいと
8 をしうくやしくおほえたまふ
9 ことむねよりあまる心ちしたま
10 ふそのをりの心をもしりいまも近
11 かうつかうまつる人々はほのかにき



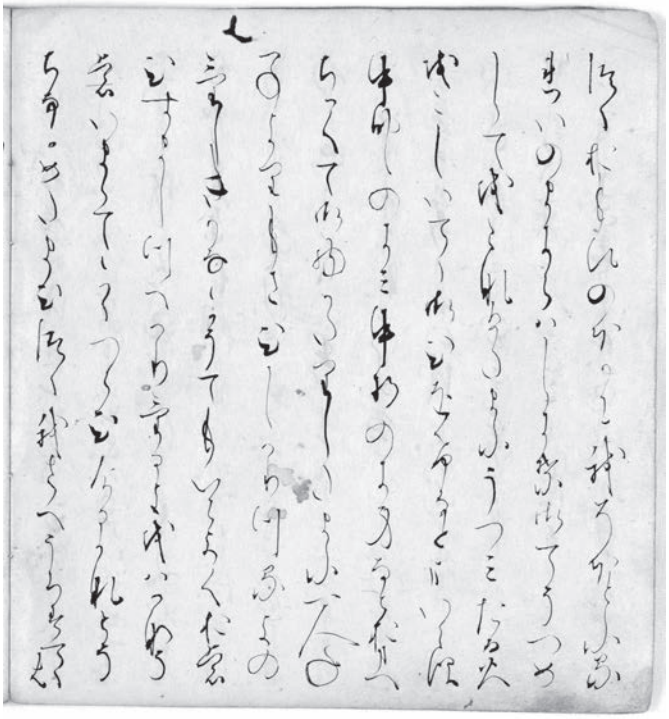
（三ウ、一四〇四・13～五・3）

1 こえいつるもあり入道の宮の
2 わたりはしめたまひしころそ
3 のをりはしもいろにはさらに
4 いたしたまはさりしかとことに
5 ふれつゝあちきなのわさやと思
6 たまへりしけしき○（の）あはれなりし
7 中にもゆきふりたりしあか月に
8 我身もたちやすらひてひえいる
9 やうにそらのけしきもはけし
10 かりしにいとなつかしくをいらかなる
11 ものからそてのいたくなきぬらし



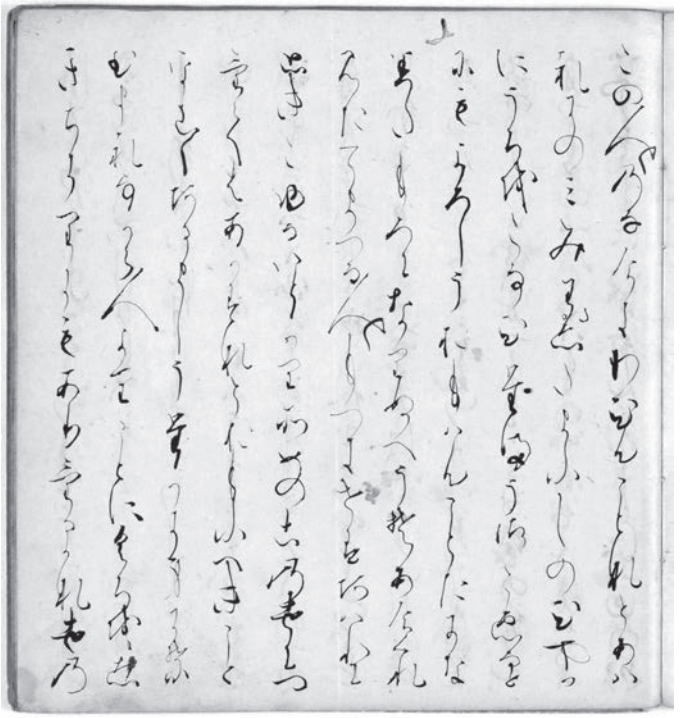
（四オ、一四〇五・3～8）

1 たまへるけるをせめてひきかくし
2 まきらはしたまひしようゐなとを
3 夜もすからゆめにても又いかなら
4 む世にかとおほしつゝけたるあけ
5 ほのにしもさうしにをるゝ女はう
6 のこゑにていみしくもつもりに
7 けるゆきかなといふをきゝつけた
8 まへるたゝそのをりの心ちし給に
9 御かたわらさひしきにもあさま
10 しくて
11 うき世にはゆきゝえなんと思



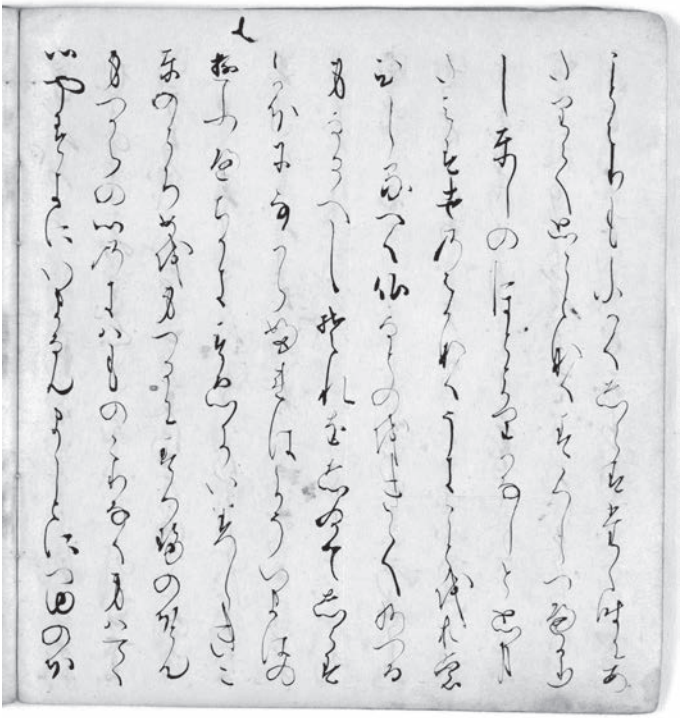
1 つゝおもひのほかに我そほとふる
2 れいのまきらはしには御てうつめ
3 してをこなひたまふうつみたる火
4 をこしいて、御ひをけなとまいらす
5 中納言のきみ中将のきみなとおまへ
6 ちかくて御物かたりしたまふ一人ね
7 つねよりもさひしかりつるよの
8 けしきかなかうてもいとよくおも
9 ひすましつへかりけるよをはかなう
10 もいまゝてかゝつらひけるかなとう
11 ちなかめたまひつゝ我さへうちすてゝは

（四ウ、一四〇五・8～12）



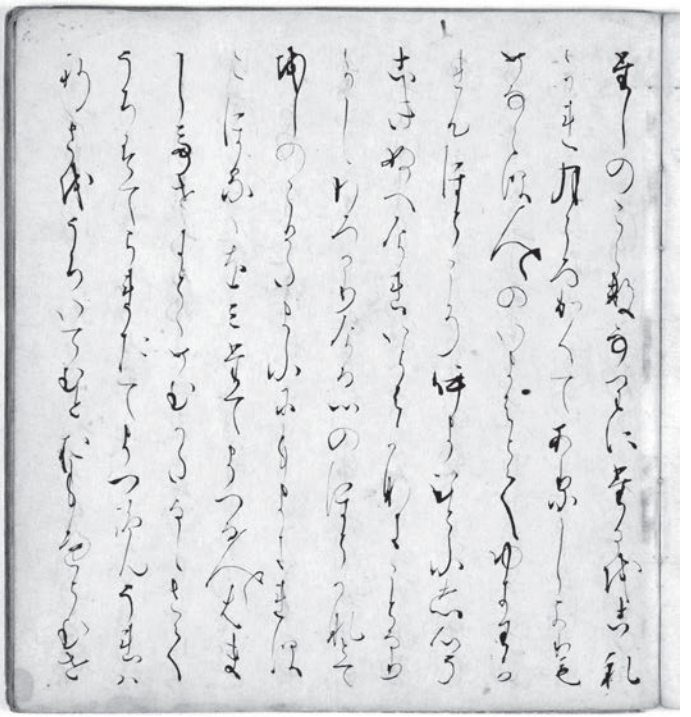
（五オ、一四〇五・12～六・4）

1 この人々のなけきわひんことなとあは
2 れにのみみわ○（た）したまふしのひやか
3 にうちをこなひたまう御こゑなと
4 にもよろしうおもはんことたにな
5 みたもろになりぬへうそあけくれ
6 見たてまつる人々もつきせすあはれに
7 思きこゆるいとかりそめのこの世につ
8 けてはあかすなとおもふへきこと
9 をさ〳〵あるましうたかき身には
10 むまれなから人よりことにくちをし
11 きちきりにもありけるかな世の



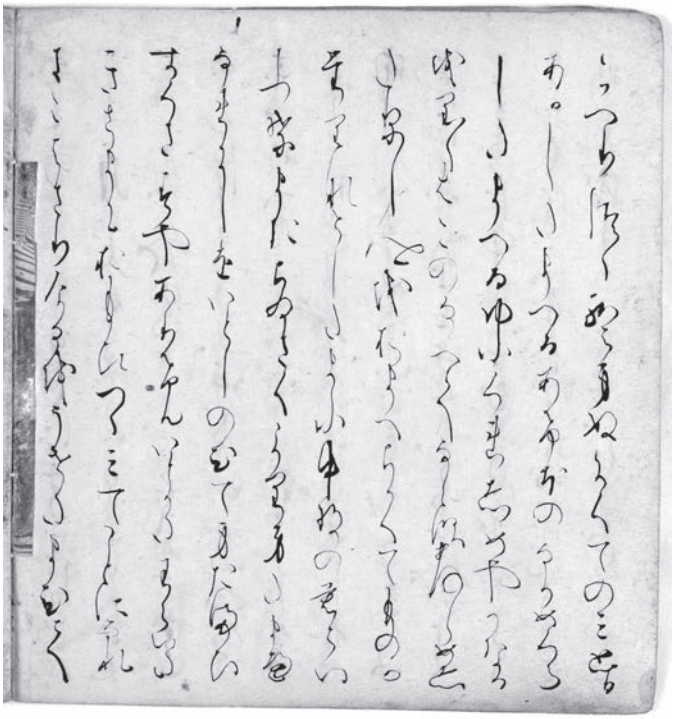
（五ウ、一四〇六・4～7）

1 ことはりもふかくしらすたゝ時にあ
2 たりて思ことなくすくしつへかり
3 しとしのほとよりかなしと思事
4 たえす世のはかなくうきことをおも
5 ひしるへく仏なとのをきて給へる
6 身なるへしそれをしゐてしらす
7 かほになからふれはかういまはの
8 ゆふへちかきすゑにいみしきこ
9 とのとちめをみつるにすくせのほとも
10 身つからの心のきはものこりなくみはて、
11 心やすきにいまなんまことにつゆのほ



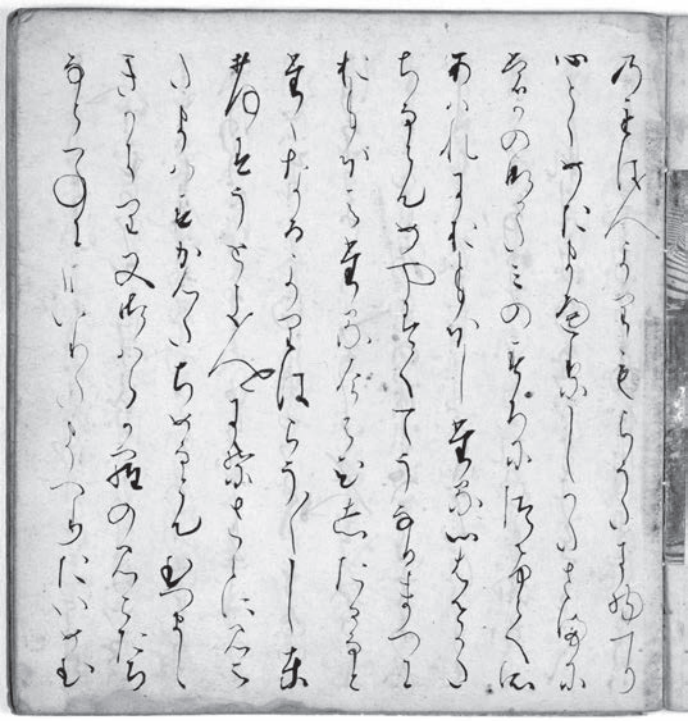
（六オ、一四〇六・7～12）

1 たしのこらすなりにたるをこれ
2 かれ月ころかくてありしよりも
3 めならす人々のいまはとてゆきわか
4 れんほとこそいまひとふし心う
5 こきぬへけれいとはかなきことなり
6 かしわろかりける心のほとかなとて
7 をしのこひたまふにもまきれす
8 こほるゝをみたてまつる人々はま
9 してせきとゝめむかたなしさて
10 うちすてられたてまつ覧うれは
11 しさをうちいてむとおもへとむせ



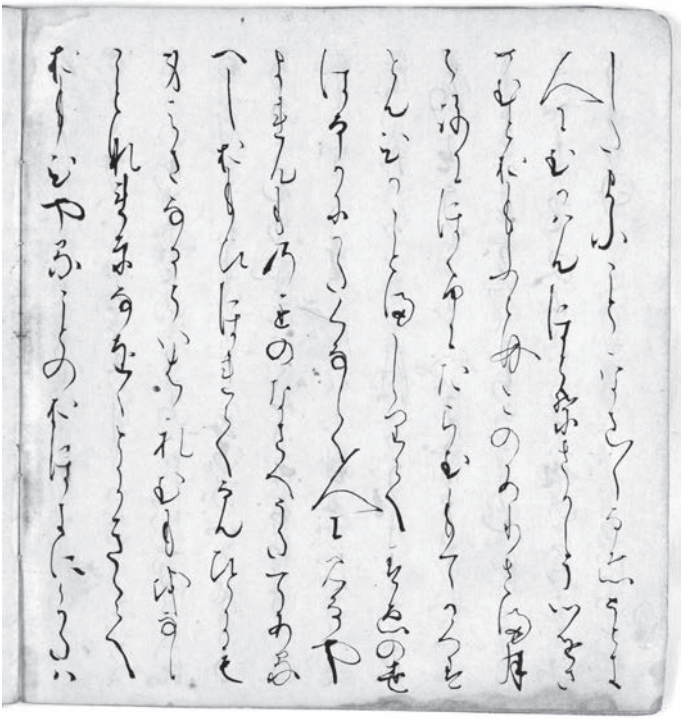
（六ウ、一四〇六・12～七・3）

1 かへりつゝやみぬかくてのみ思ひ
2 あかしたまへるあけほのなかめくら
3 したまへるゆふくれしめやかなる
4 をり〳〵はこのなへてならすおほしめし
5 たりし人々をおまへちかくてものか
6 たりなとしたまふ中将の君とい
7 ふはまたちゐさくよりみたまへ
8 なれにしをいとしのひてみたまひ
9 すくさすやありけんいとかたわらいた
10 きさまにおもひつゝみてことになれ
11 きこえさりけるをうせたまひて



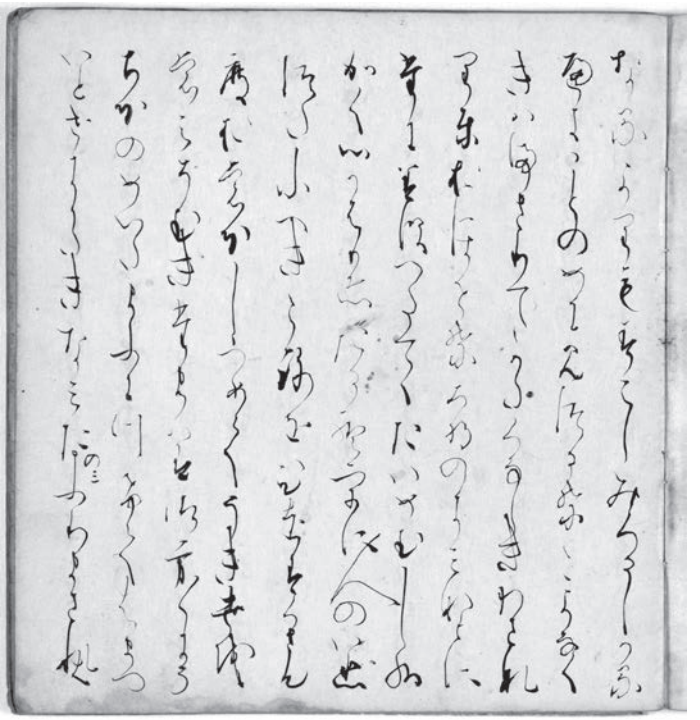
（七オ、一四〇七・3～8）

1 のちは人よりもらうたき物に
2 心とゝめたまへりしかたさまに
3 もかの御かたみのすちにつけてそ
4 あはれにおもほしたる心はせかた
5 ちなともめやすくてうなひまつに
6 おもほえたるけはひしたるなと
7 たゝなるよりはらう〳〵しと
8 おほすうとき人々にはさらに見え
9 たまはすかんたちめなともむつまし
10 きかきり又御はらからのみこたち
11 なとつねにまいりたまへりたいめむ



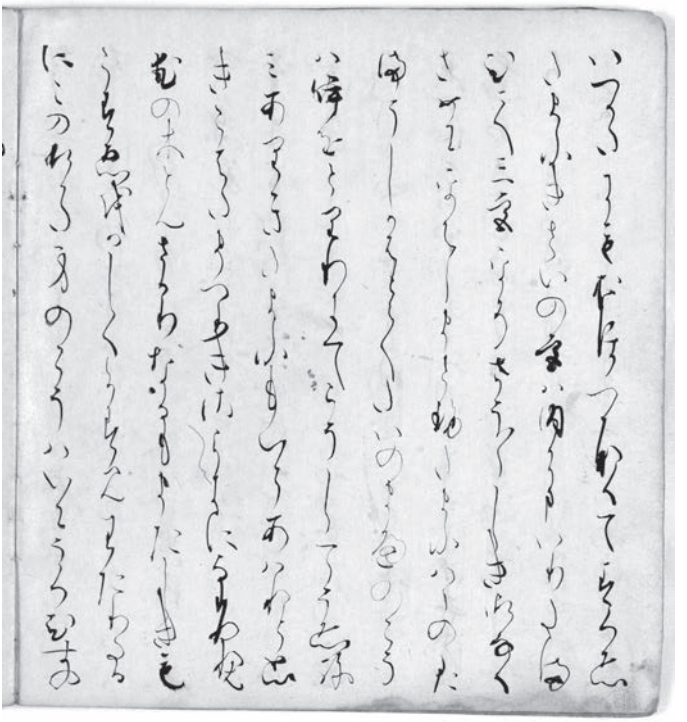
（七ウ、一四〇七・8～12）

1 したまふことをさ〳〵なしうとき
2 人にむかはんほとはさかしう心をさ
3 めむとおもふともこのありさま月
4 ころにほけにたらむもてかくす
5 ともひかことましりてすゑの世
6 はるかにかたくなしく人に見なや
7 まれんものちのなさへうたてある
8 へしおもひほれてなんひとにも
9 みえさなるといはれむもをなし
10 ことなれとなをゝとにきゝて
11 おもひやることのおほきにかたは



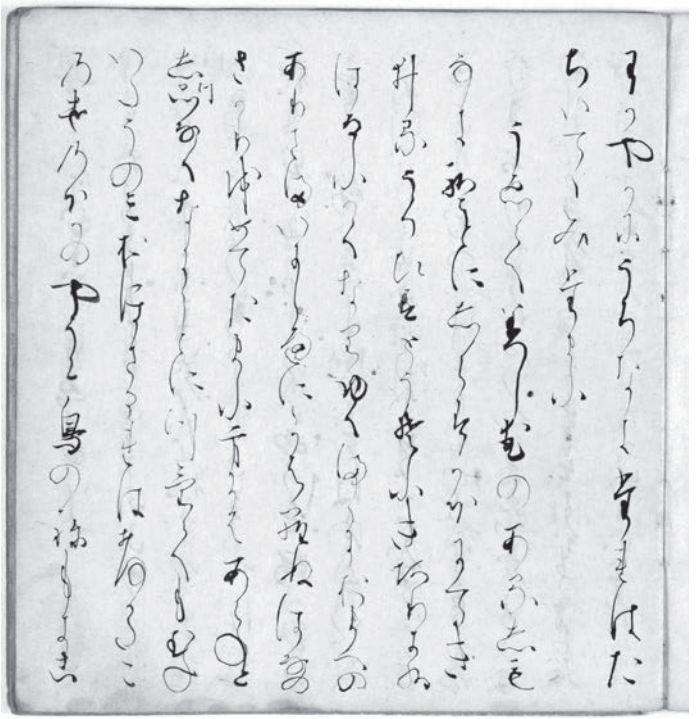
（八オ、一四〇七・12～八・3）

1 なるよりもすこしみくるしかる
2 へきことのめに見つるはこよなく
3 きはまさりてかたくなしきわさな
4 りとおほせは大将のきみなとに
5 たにみすへたてゝたいめむし給
6 かく心かはりしたるやうに人のいひ
7 つたふへきころをひをすくさん
8 とおもほしゝつめてうき世を
9 もえそむきたまはす御方〳〵にう
10 ちほのめいたまふにつけてはまつ
11 いとせきかたきなみた（のみ）○ふりまされは



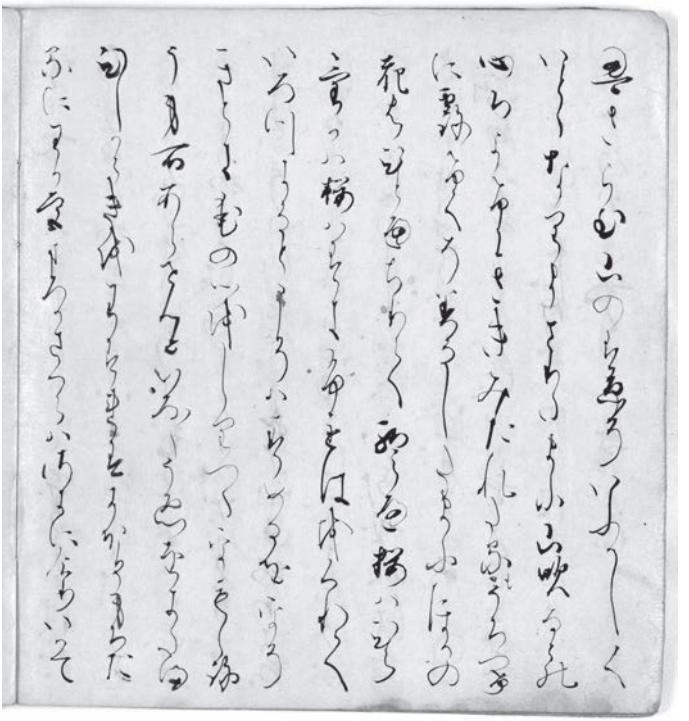
（八ウ、一四〇八・3～7）

1 いつかたにもおほつかなくてすくし
2 たまふきさいの宮は内にまいりたま
3 ひて三宮をそさう〳〵しき御なく
4 さめにをはしまさせたまふはゝのゝた
5 まうしかはとてたいのまへのこう
6 はいをとりわきてらうしてうしろ
7 みありきたまふもいとあはれと思
8 きこえたまへりきさらきになりぬれは
9 花の木ともさかりなるもまたしきも
10 こすゑをかしくかすみわたりたる
11 にこの御かたみのこうはいにうくひすの



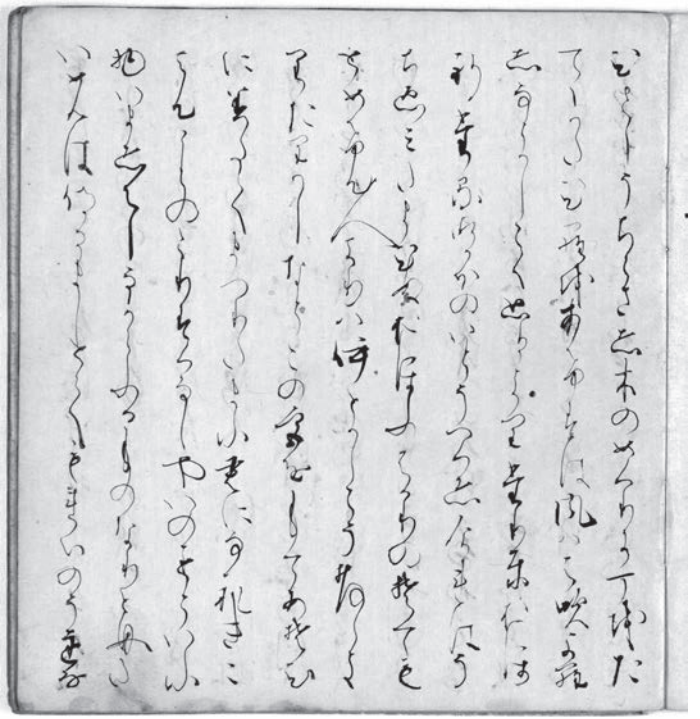
（九オ、一四〇八7～12）

1 わかやかにうちなきたれはた
2 ちいてゝみたまふ
3 　うゑてみし花のあるしも
4 なきやとにしらすかほにてき
5 ゐるうくひすとうそふきありき給
6 はるふかくなりゆくまゝにおまへの
7 ありさまいにしへにかはらぬはなの
8 さかりをめてたまふ方にはあらねと
9 しっ○心なくなにことにつけてもむね
10 いたうのみおほさるれはおほかたこ
11 の世のほかのやうに鳥のねもきこ



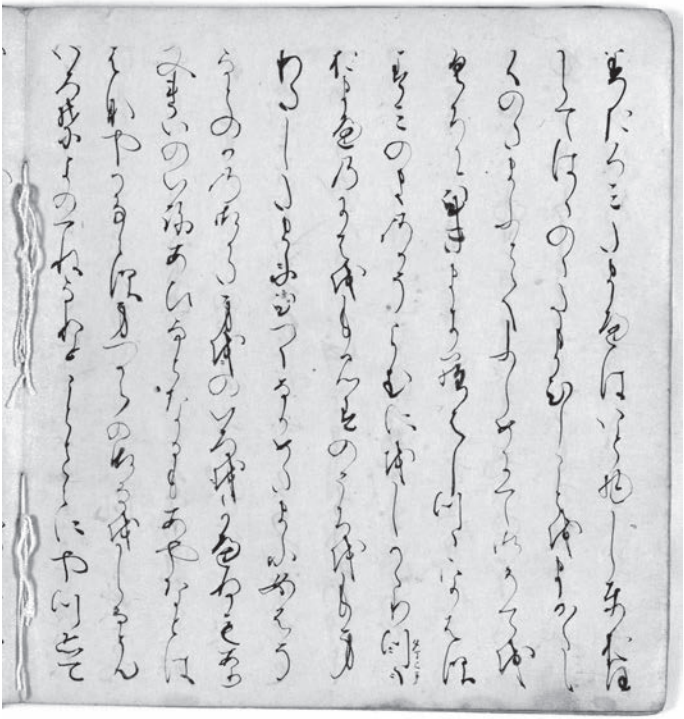
（九ウ、一四〇八12～九・3）

1 えさらむ山のすゑそいふかしく
2 いとゝなりまさりたまふ山吹なとの
3 心ちよけにさきみたれたる○も うちつけ
4 に露けくそみなしたまふほかの
5 花はひとへちりてやへ桜はひら
6 けかは桜はすきふちはをくれて
7 いろつきなとこそはすめるをそ
8 きとき花の心をしりつゝをもしろ
9 うみ所あらせんといろ〳〵うゑをきたま
10 ひしかときをわすれすにほひみちた
11 るにわか宮まろかさくらはさきにけりいかて



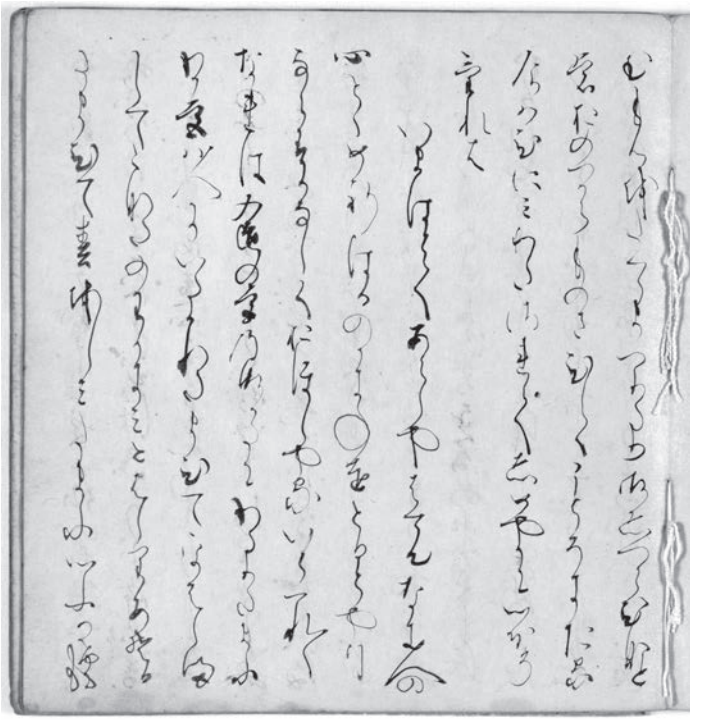
（一〇オ、一四〇九・3～8）

1 ひさしうちらさし木のめくりに丁をた
2 て、かたひらをあけすは風はえ吹よら
3 しなとかしこく思ひよりたりとおほ
4 したる御かほのいとうつくしけれはう
5 ちゑみたまひぬおほふはかりのそても
6 とめけん人よりはいとかしこうおほしよ
7 りたりかしなとこの宮をもてあそひ
8 にみたてまつりたまふ君になれきこ
9 えんことのこりすくなしやいのちといふ
10 物いましはしなからふるものなりともた
11 いめんは侍るましとてもれいのうちな



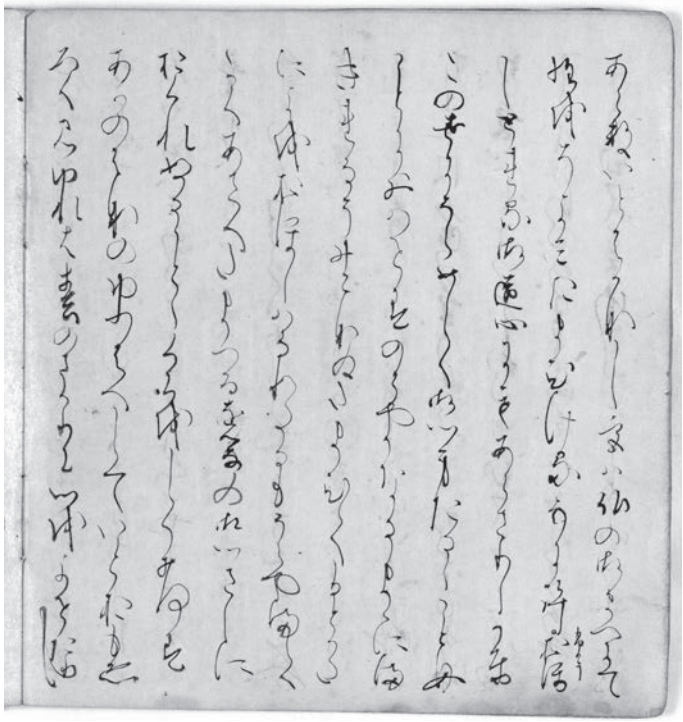
（一〇ウ、一四〇九・8～13）

1 みたくみたまへはいと物しとおほ
2 しては、の、たまひしことをまか〳〵し
3 くのたまふとてふしめにて御そてを
4 くちにひきまきらはしつゝをはす
5 すみのまのかうらむにをしかゝりつゝ（タマヒテ）
6 おまへのにはをもみすのうちをもみ
7 わたしたまふひつゝなかめたまふ女はう
8 なとのかの御かたみをのいろをかへぬもあり
9 又れいのいろあひなとなるもあやなとは
10 はなやかならすみつからの御なをしなとも
11 いろはよのつねなれとことさらにやつして



（一一オ、一四〇九13〜一〇・5）

1 むもんをたてまつりたり御しつらひなと
2 もおのつからものさひしくことそきたる
3 けはひにみわたされてしめやかに心ほそ
4 けれは
5 いまはとてあらしやはてんなき人の
6 心とゝめしはるのかきねをとひとやり
7 ならすかなしくおほしやるいとつれ〳〵
8 なれは入道の宮の御かたにわたりたまふ
9 わか宮は人にいたかれたまひてをはしま
10 してこなたのわかきみとはしりあそひ
11 たまひて春をしみたまふ心ふかけにも

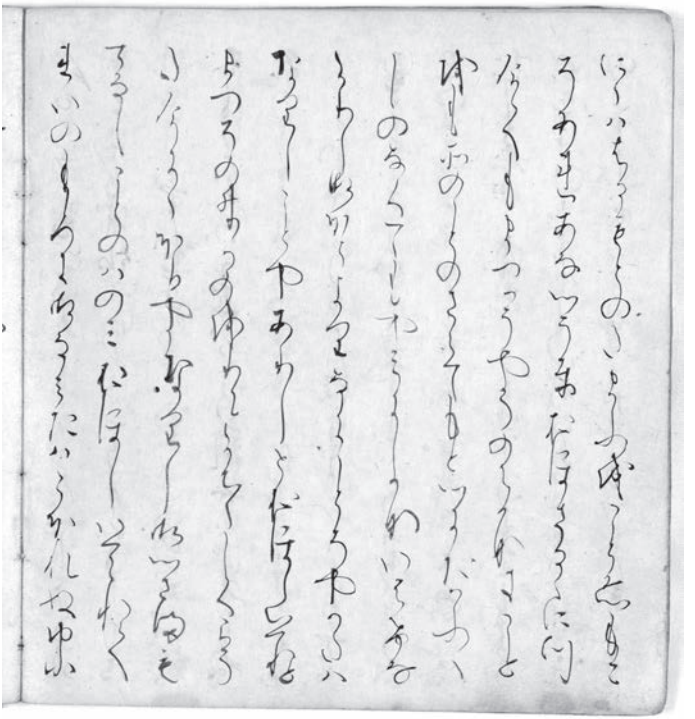


（一一ウ、一四一〇・5～10）

1 あらすいとはかなし宮は仏の御まへにて
2 経をそよみたまひけるなに許（ふかう）○おほ
3 しとれる御道心にもあらさりしかと
4 この世にうらめしく御心みたるゝことも
5 ことにおはせすのとやかなるまゝにま
6 きれなうおこなゐたまひてひとかた
7 によをおほしはなれたるもうらやましく
8 かくあまへたまへるをんなの御心さしに
9 おくれぬることゝくちをしくおほす
10 あかのはなのゆふはへしていとおもし
11 ろく見ゆれは春のさかりに心をよせたりし

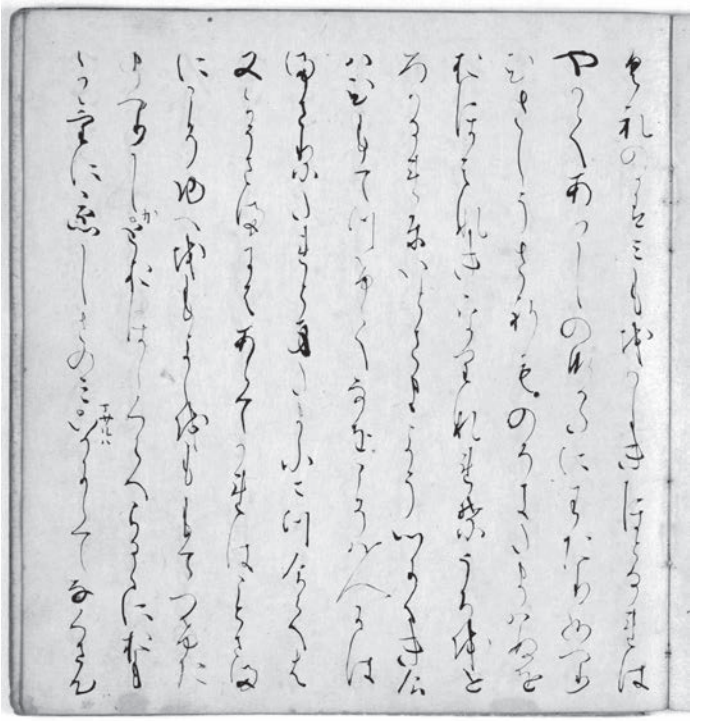
（一二オ、一四一〇・10～一・1）

1 人なくて花のいろもすさましくみ
2 なさるゝを仏の御かさりにてこそみ
3 るへかりけれとのたまひてたいのひんかし
4 おもてなる山吹こそ猶世にみえぬ
5 花のさまなれふさのおほきさなと
6 よしなたかうなとはをきてさりける
7 花にやあらむはなやかにゝきわゝしく
8 さいたるなんおもしろかりけるうゑし人
9 なき春ともしらすつねよりもにほ
10 ひかさねたるこそあはれに侍へれと
11 のたまふ御いらへになに心もなくた



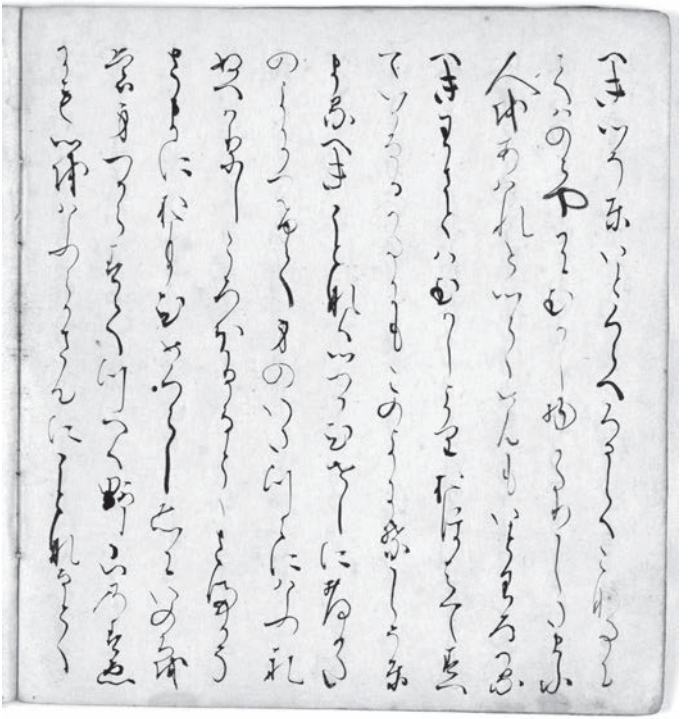
（一二ウ、一四一・1～7）

1 に、ははるもとのたまふをことしもこ
2 そあれあな心うとおほさる、につ
3 けてもまつかうやうのはかなきこと
4 をもそのことのさらてもと心にたかふ、
5 しのなくてもやみにしかないはけな
6 かりし御ほとよりなにことそやかたは
7 なりしことやありしとおほしいつれと
8 まつそのおりかのをりにかと〳〵しくらう
9 たけに、ほひやかなりし御心さまも
10 てなしことのはのみおほしいてられて
11 れいのもろき御なみたはこほれぬゆふ



（一三オ、一四一・7～12）

1 くれのかすみもをかしきほとなれは
2 やかてあかしの御かたにわたり給へり
3 ひさしうさしものそきたまはぬを
4 おほえなきをりなれはうちをと
5 ろかるれといとさまよう心にくきけ
6 はひもてつけてなをこそは人には
7 まさりたれとみたまふにつけては
8 又かうさまにはあらてかれはことさま
9 にこそゆへをもよしをももてつけた
10 まへりし○（か）とおほしくらへらるゝにおも
11 かけに恋しさのみ○（マサルハ）いかにしてなくさむ

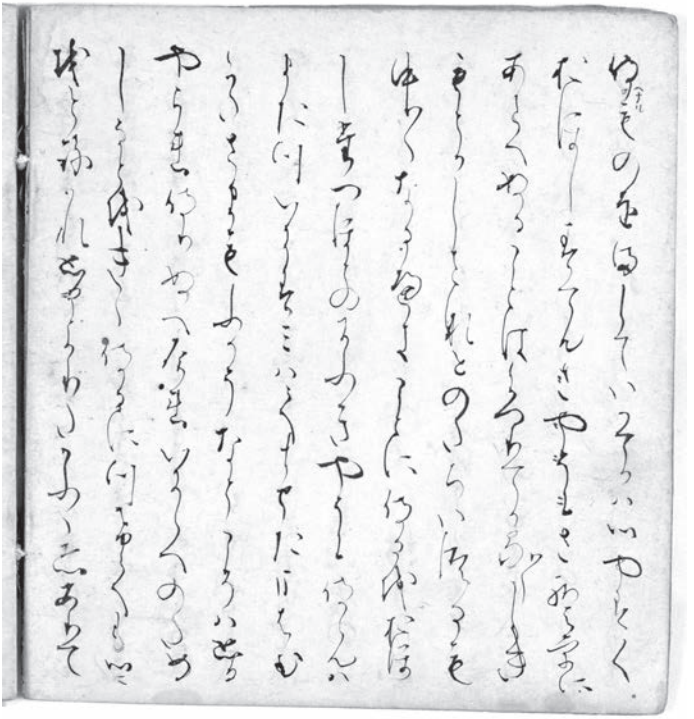


（一三ウ、一四一一・12〜二・3）

1 へき心そといとくらへくるしくこなたに
2 てはのとやかにむかし物かたりしたまふ
3 人をあはれと心とゝめんもいとわろかる
4 へきわさとはむかしよりおほえてすへ
5 ていかなるかたにもこのよにはしうと
6 まるへきことなく心つかひせしにおほかた
7 のよにつけて身のいたつらにはふれ
8 ぬへかりしころほひなとゝさまかう
9 さまにおもひめくらししにいのちを
10 も身つからすてつへく野山のすゑ
11 にも心をはふらかさんにことなるとゝ

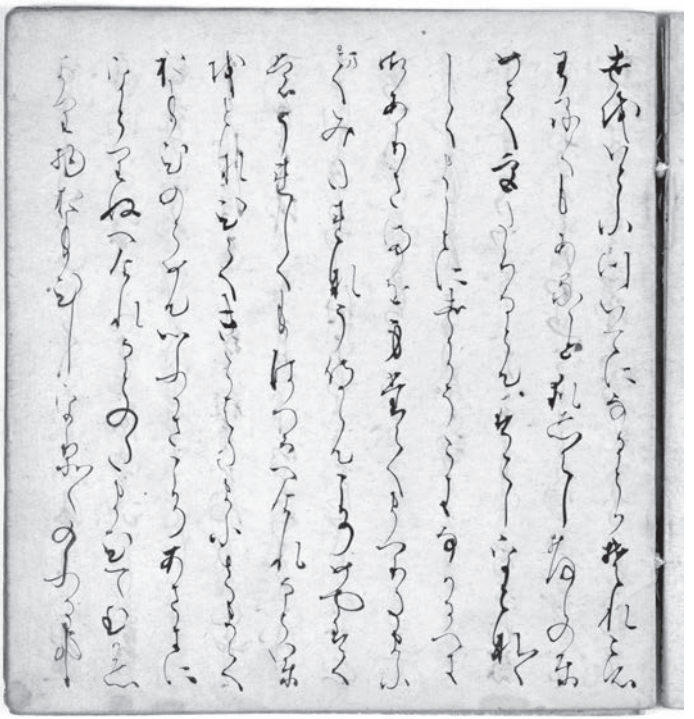
（一四オ、一四二・3～7）

1 こほりもあるましくなんおもひ
2 なりしをすゑの世にしもいまはかき
3 りのほとちかき身にさもあるまし
4 きほたしおほくかゝつらひていまゝて
5 すくしてけるか心よはくもとかし
6 きことなとさしてひとすちのか
7 なしさにはのたまはねとおほしたる
8 さまをことはりにいとをしうみたて
9 まつりたまふおほかたのひとめにな
10 にはかりをしけなき人たに心のうちの
11 ほたしはおのつからおほかるものに



（一四ウ、一四一二・7～12）

1 侍（ヘナル）○ものをましていかてかは心やすく
2 おほしすてんさやうにさやうに
3 あさへぬることはかへりてかる〳〵しき
4 もとかしさなとのたちいつるも
5 中〳〵なるへきことに侍るをおほ
6 したつほとのにふきやうに侍らんは
7 またついにすみはてさせたまはむ
8 かたさまもふかうなとこそは思ひ
9 やられ侍りぬへけれいにしへのため
10 しなとをきゝ侍るにつけても心に
11 をとろかれ思ひよりたかふゝしありて

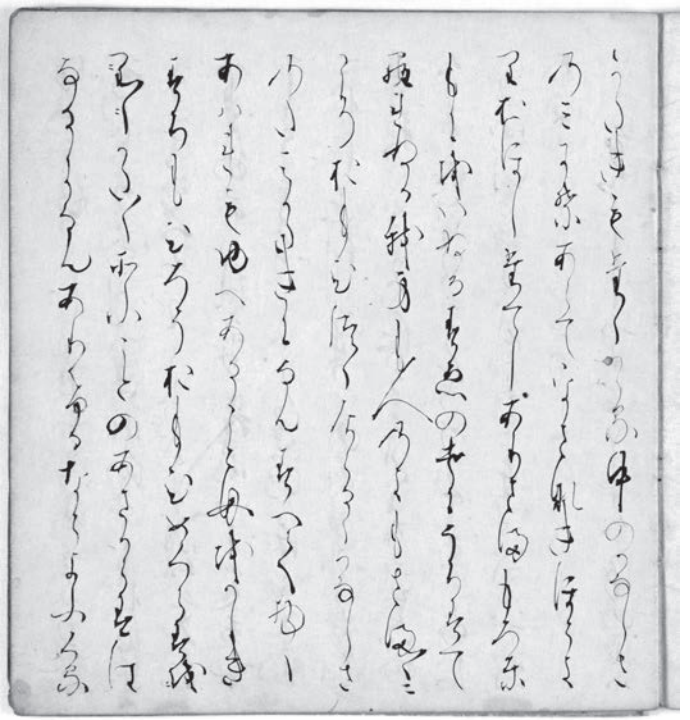


（一五オ、一四一二・12〜三・3）

1 世をいとふついてになるとかそれこそ
2 わろくもあること猶しはしおほしのと
3 めて宮たちなともすこしをとな〳〵
4 しくまことに世にうこきなかるへき
5 御ありさまをみたてまつりたまふ
6 ○（ま）てみたれなう侍らんこそめやすく
7 もうれしくもはへるへけれなといと
8 をとなひてきこえたまふさまて
9 おもひのとめん心ふかさこそあさきに
10 をとりぬへけれなとのたまひてむかし
11 より物おもひしをり〳〵のふる事

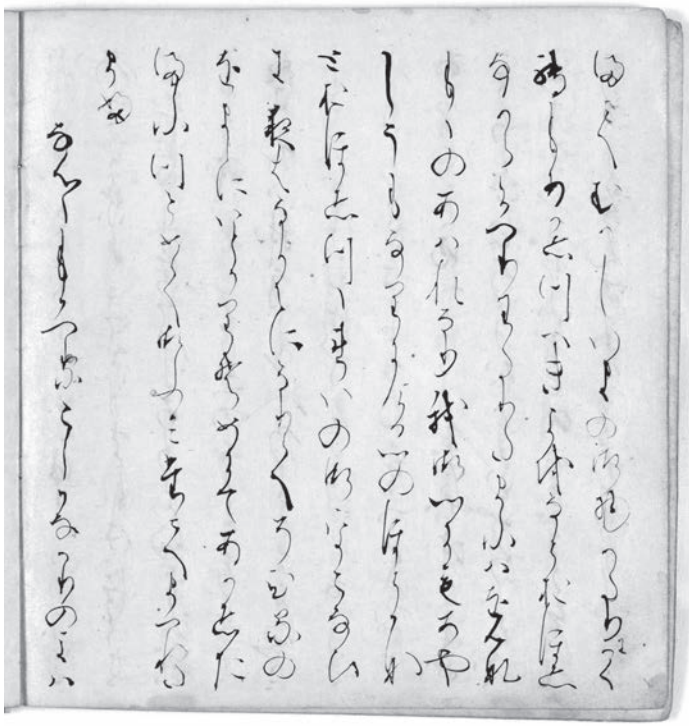
（一五ウ、一四一三・3～8）

1 なとかたりいてたまふ中にこ入道
2 きさいの宮かくれたまひし春な
3 む花のいろみてもまことに心あらは
4 なとおほえしそれはおほかたの世に
5 つけてをかしかりし御ありさまを、
6 さなかりし時よりみたてまつりし
7 みてさるとちめのかなしさも人よ
8 りことにおほえたまひしなりみつから
9 とりわく心さしにものゝあはれは
10 よらぬわさなりとしころへぬる人に
11 をくれて心をさめんかたなくわすれ



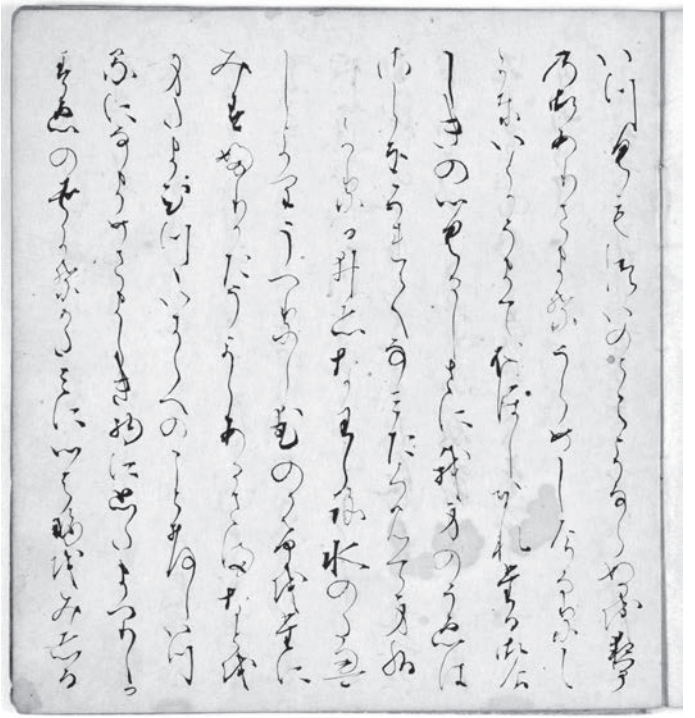
（一六オ、一四一三・8～12）

1 かたきもたゝかゝる中のかなしさ
2 のみにはあらてをさなきほとよ
3 りおほしたてしありさまもろと
4 もにをいぬるすゑの世にうちすて
5 られぬる我身も人のよもさま〴〵に
6 こそおもひつゝけらるゝかなしさ
7 のたえかたきになんすへて物ゝ
8 あはれもゆへあることもをかしき
9 すちもひろうおもひめくらすを
10 り〳〵かた〳〵そふことのあさからすは
11 なるになんありけるなとよふくる



（一六ウ、一四一三・12～四・3）

1 まてむかしいまの御物かたりかく（に）
2 てもあかしつへきよをなとおほし
3 なからかへりわたりたまふはをんな
4 もゝのあはれなり我御心にもあや
5 しうもなりにける心のほとかな
6 とおほしつゝれいの御をこなひ
7 に夜はなかはになりてそひるの
8 をましにいとかりそめにてあかした
9 まふつとめて御ふみたてまつれた
10 まふ
11 なく〳〵もかへりこしかなかりのよは

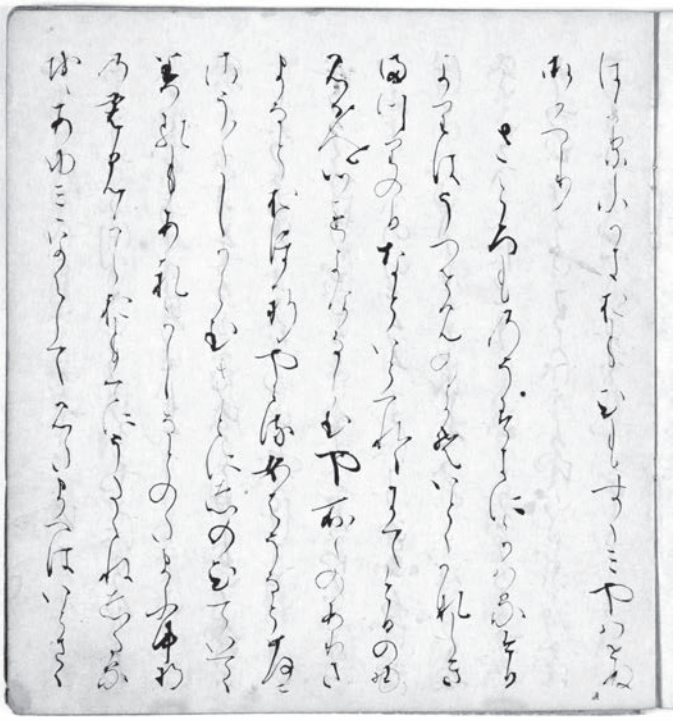


（一七オ、一四一四・3～8）

1 いつくもついのとこよならぬを夜へ
2 の御ありさまはうらめしけなりし
3 かといとかうまておほしほれたる御け
4 しきの心くるしさに我身のうゑは
5 さしをかれてなみたくみてみ給
6 かりかゐしなわしろ水のたえ
7 しよりうつりし花のかけをたに
8 みすふりかたうよしあるさまなとを
9 みたまひつゝいにしへのことおほしいつ
10 るになまめさましき物に思たまへりしか
11 すゑの世にはかたみに心はせをみしる

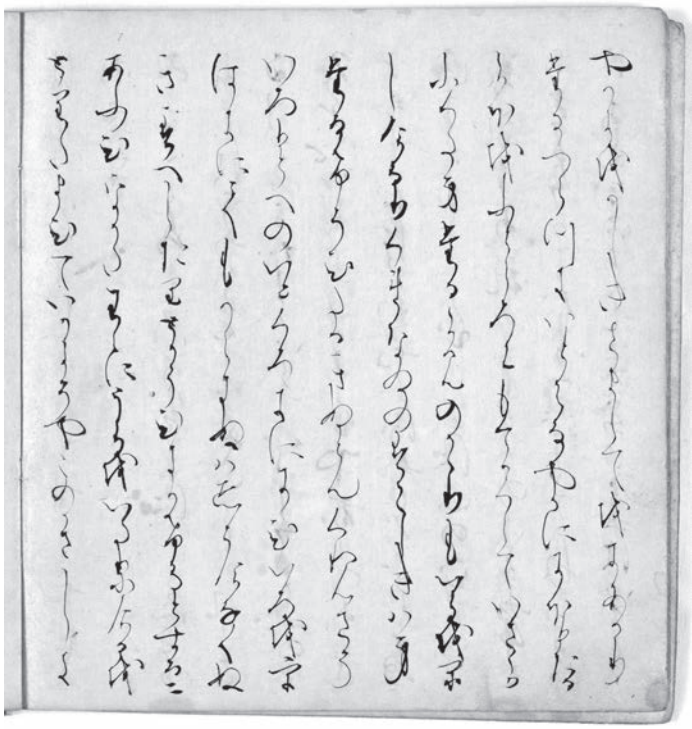
（一七ウ、一四一四・8～14）

1 とちにてうしろやすきさまにう
2 ちたのむかたにはおもひかはし
3 又さりとていとしもうちとけすゆへ
4 ありてもてなしたまへりし心をき
5 てを人はえみしらさりきかしなと
6 おほしいつせちにさう〳〵しき
7 ときこのおほんかたには時〳〵かうやうに
8 もほのめきたまふ夏の御かたよりこ
9 ろもかへの御さうそくたてまつりた
10 まふとて
11 なつころもたちかへてける今日



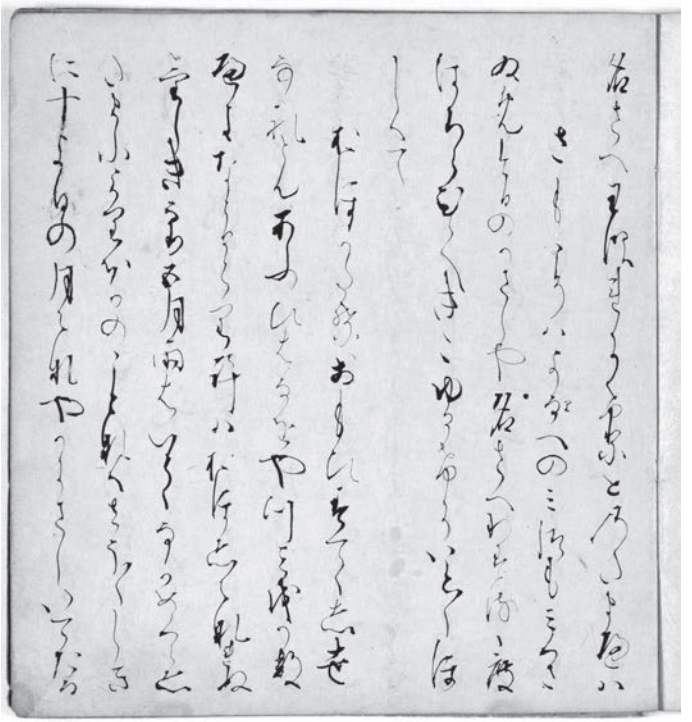
（一八オ、一四一四・14～五・5）

1 はかりふかきおもひもすゝみやはせぬ
2 御かへり
3 　さころものうすきにかはる今日
4 よりはうつせみのよそいとゝかなしき
5 まつりの日なといとつれ〳〵にて今日の物
6 見る人々心ちよけならむやと所々のありさ
7 まなとおほしやらる女はうなと如何に
8 さう〳〵しからむさとにしのひていて、
9 みるもあれかしなとのたまふ中将
10 の君ひんかしおもてにうたゝねしたる
11 をあゆみをはして見たまへはいとさゝ



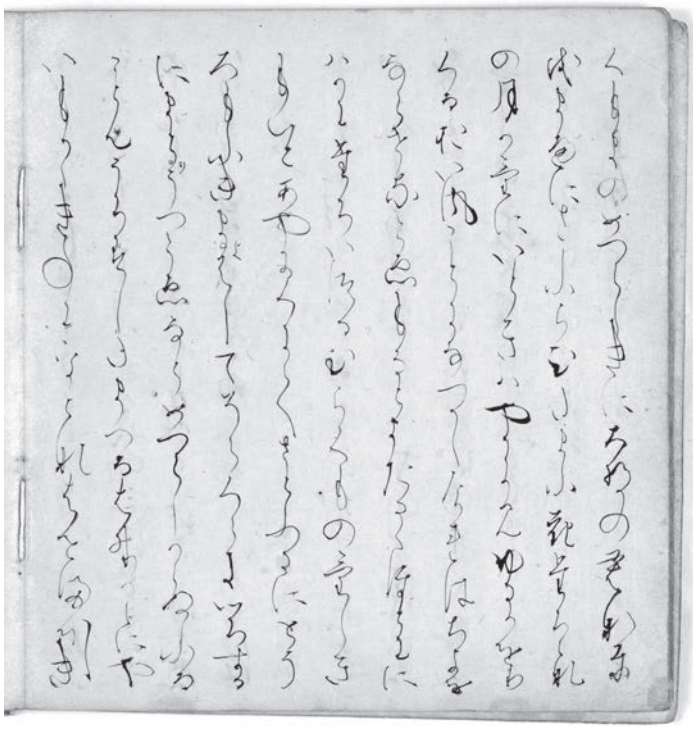
（一八ウ、一四一五・5～10）

1 やかにをかしきさましてをきあかり
2 たるつらつきいとはなやかににほひたる
3 かほをふところにもてかくしていさゝか
4 ふくたみたるかみのかゝりもいとをか
5 しけなりくれなゐのすこしきはみ
6 たるけそひたるきぬともくわんさう
7 いろひとへのいとくろきににひいろをう
8 はきにてもからきぬはしとけなくぬ
9 きすへしたりとかうひきかけなとするに
10 あふひをかたわらにうちをいたりけるを
11 とりたまひていかにそやこのかさしよ



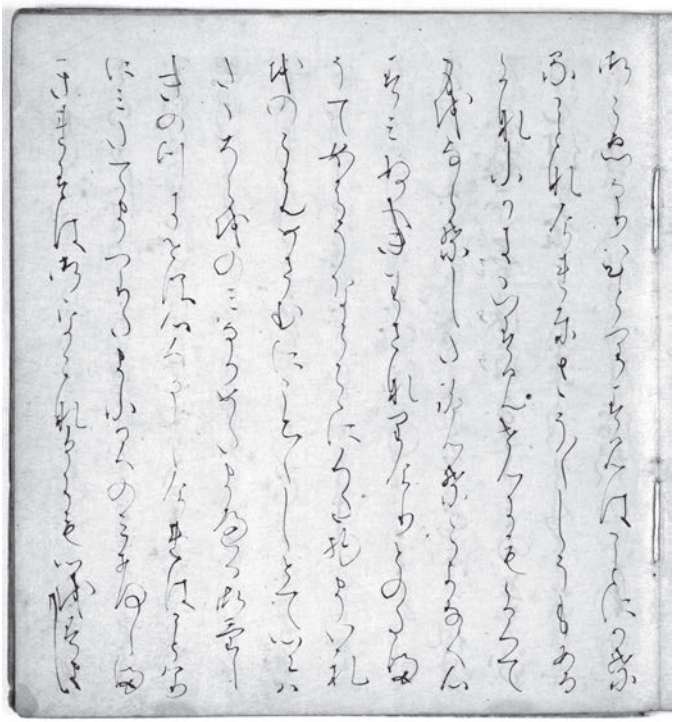
（一九オ、一四一五・10〜六・1）

1 名さへわすれにけりとのたまへは
2 さもこそはよるへのみつもみくさ
3 ゐめ今日のかさしや名さへわするゝと
4 はちらひてきこゆるけにいと〳〵ほ
5 しくて
6 おほかたはおもひすてゝし世
7 なれともあふひはなをやつみをかす
8 へきなとひとり許はおほしはなれぬ
9 けしきなり五月雨はいとゝなかめくらし
10 たまふよりほかのことなくさう〳〵しき
11 に十よ日の月はなやかにさしいてたる



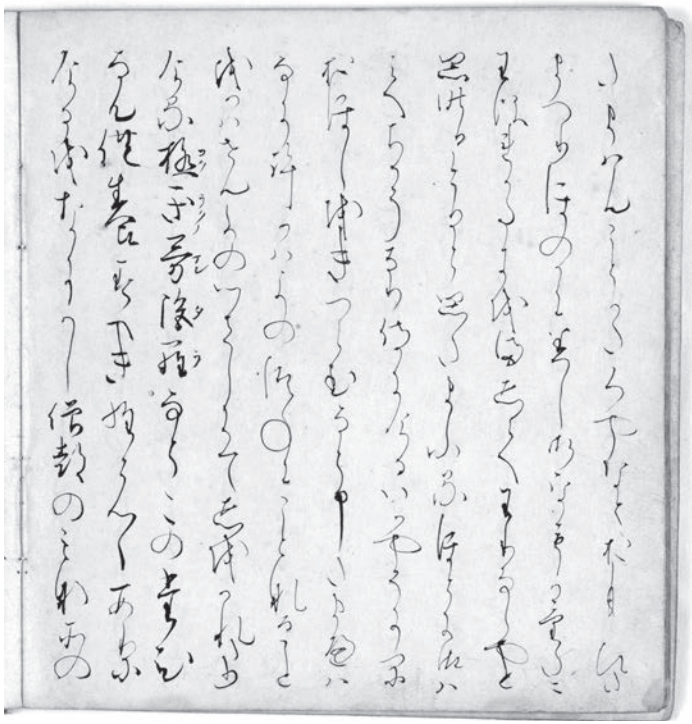
（一九ウ、一四一六・1～7）

1 くもまのめつらしきに大将の君なと
2 をまへにさふらひたまふ花たちはな
3 の月かけにいときはやかに見ゆるかをり
4 くるおい風ことになつかしけれはちよを
5 ならせるこゑもなとまたるゝほとにに
6 はかにたちいつるむらくものけしき
7 もいとあやにくにてさとふるにとう
8 ろもふきま○（よ）はしてそらくらき心ちする
9 にまと○（ヲ）うつこゑなとめつらしからぬふる
10 こともうちすしたまへるはおりからにや
11 いもかゝきねにをとなはせまほしき



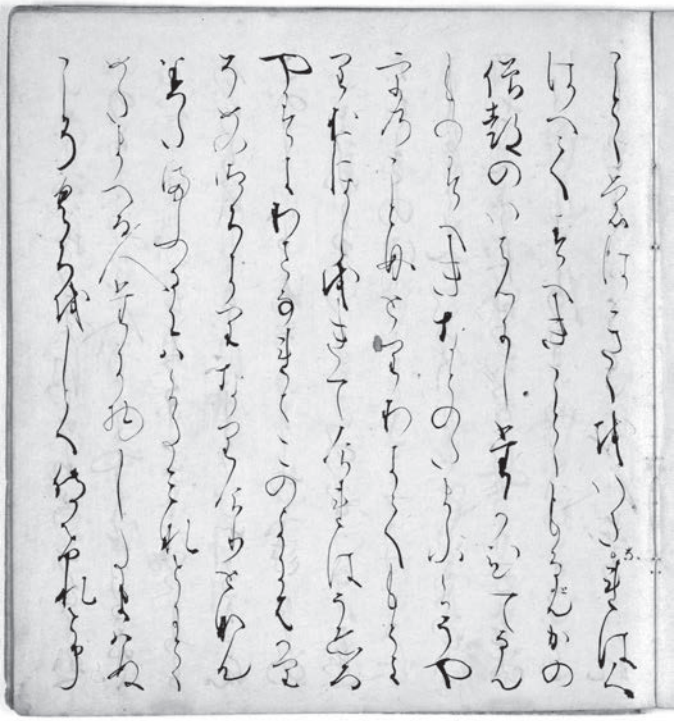
（二〇オ、一四一六・7～12）

1 御こゝなりひとりすみはことにかは
2 ることなけれとさう〳〵しうもある
3 かなふかき山すみせんにもかくて
4 身をならはした覧はこよなく心
5 すみぬへきわさなりけりとのたま
6 うて女はうなとこゝにくた物まいれ
7 をのこともめさむにこと〳〵しとて心には
8 たゝそらをのみなかめたまへる御けし
9 きのつきせす心くるしけれはことはり
10 にみたてまつりたまふかくのみおほしま
11 きれすは御をこなひにも心をすまし



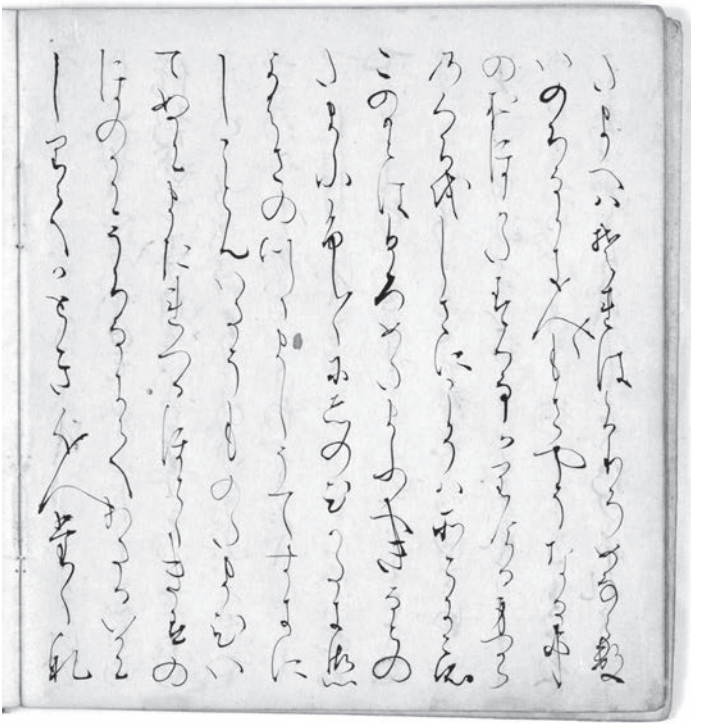
（二〇ウ、一四一六・12～七・3）

1 たまはんことかたくやなとおもひた
2 まへりほのかにみし御をもかけたに
3 わすれかたきをましてわりなしやと
4 思昨日今日と思たまふるほとに御は
5 てちかうなり侍にけるいかやうにか
6 おほしをきつらむなと申たまへは
7 なに許かはよのつねにことなること
8 をかはせんかの心さしにてしをかれたり
9 ける極楽曼陀羅（コクラクノマンタラ）なとこのたひ
10 なん供養すへき経ともゝあり
11 けるをなにかし僧都のみなその



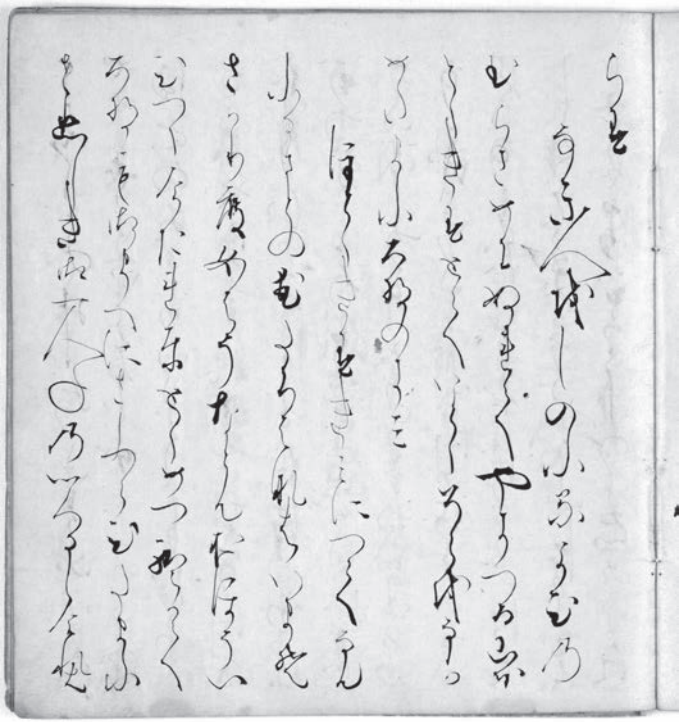
（二ウ、一四一七・3～7）

1 こと、もはき、をいた○（な）れはく
2 はへてすへきこと、もな○（と）もかの
3 僧都のいはんにしたかひてなん
4 ものすへきなとのたまふかうや
5 うのこともとりわきてもとよ
6 りおほしをきてけれはうしろ
7 やすきわさなれとこのよにはかり
8 その御ちきりなりけりとなん
9 みたまふるにはかたみなとにと、
10 めたまへる人たに物したまはぬ
11 こそくちおしく侍けれと申



1 たまへはそれはかりそめならす
2 いのちなかき人々もさやうなる事
3 のおほかたすくなかりける身つから
4 のくちおしさにこそはそこにこそ
5 このかとはひろめたまふへきなとの
6 たまふふし〳〵にしのひかたき御心
7 よはさのつゝましうてすきに
8 しこともいたうものたまひい
9 てぬにまたれつるほとゝきすの
10 ほのかにうちなきてわたるいかに
11 しりてかときく人たゝな

（二一ウ、一四一七・7～11）

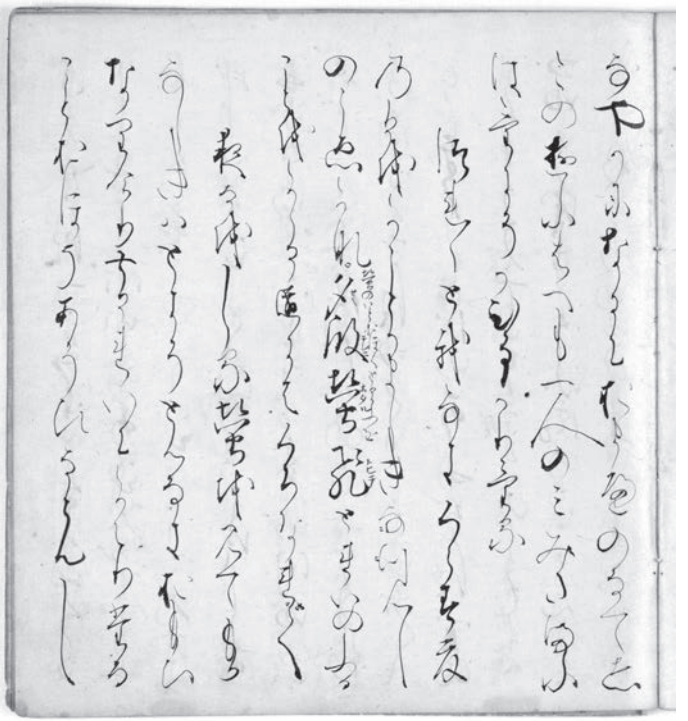


（二二オ、一四一七・11～八・2）

1 らす
2 　なき人をしのふるよひの
3 むらさめにぬれてやきつる山ほ
4 と、きすとていと、そらをなか
5 めたまふ大将のきみ
6 　ほと、きすきみにつてなん
7 ふるさとの花たちはなはいまそ
8 さかりと女はうなともおほうい
9 ひつ、けたれととゝめつやかて
10 大将も御まへにさふらひたまふ
11 さひしき御一人ねの心くるしけれは

（二二ウ、一四一八・2～6）

1 とき〳〵とのゐしたまふをは
2 せし世にいとけとほかりしを
3 ましのあたりいたうもたちは
4 なれぬをりなとにつけつゝ
5 おもひいつることおほかりいと
6 あつきころすゝしきかたになか
7 めたまふにいけのはちすさかり
8 なるを見たまふにつけてもいか
9 てなみたのとおほさるほれ〳〵
10 しくてなかめたまふほとにく
11 れにけりひくらしのこゑのいとは

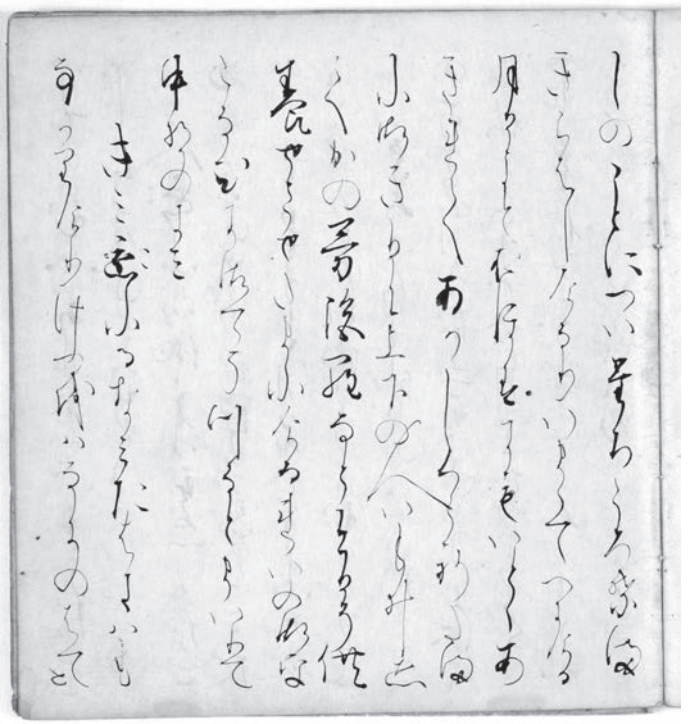


（二三オ、一四一八・6～12）

1 なやかになるにおまへのなてし
2 このゆふはへも一人のみみたまふ
3 はけにそかひなかりける
4 つれ〳〵と我なきくらす夏
5 の日をかことかましきなつむし
6 のこゑかな ○ 夕殿蛍飛とれいのふる
7 ことをかゝる道にはくちなれ ○ て
8 夜るをしる蛍を見てもか
9 なしきはときそともなきおもひ
10 なりけり七日れいにかはりたる
11 ことおほうあそひなともし

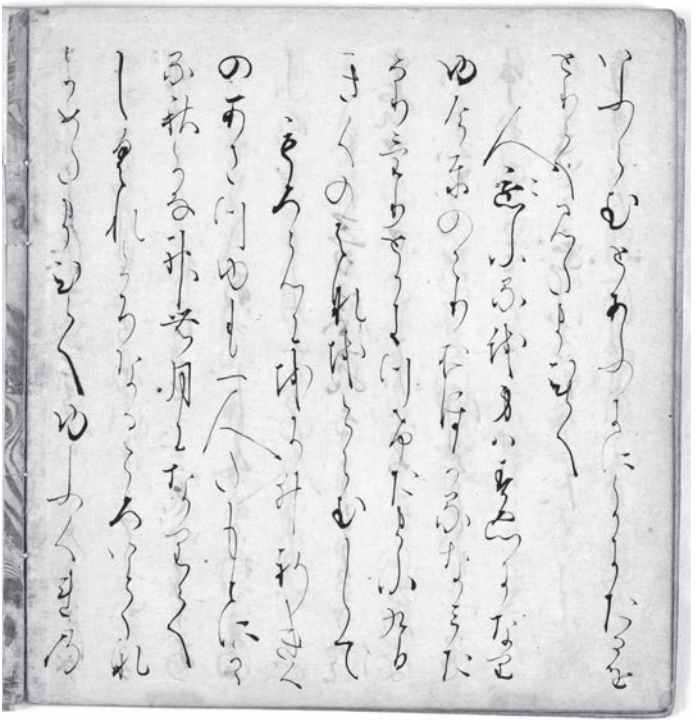
1 たまはすつれ〳〵となかめくら
2 したまふほしあひみる人もな
3 しまた夜ふかうひと、ころをき
4 ゐたまひてつまとをしあ
5 けたまへるにせんさいのつゆのい
6 としけうわたとのよりみわ
7 たさるれはいてたまひて
8 　たなはたのあふをは雲の
9 よそにみてわかれのにはに
10 つゆそをきそふ風のをともたゝ
11 ならすなりゆくころしも御ほう

（二三ウ、一四一八・12～九・3）



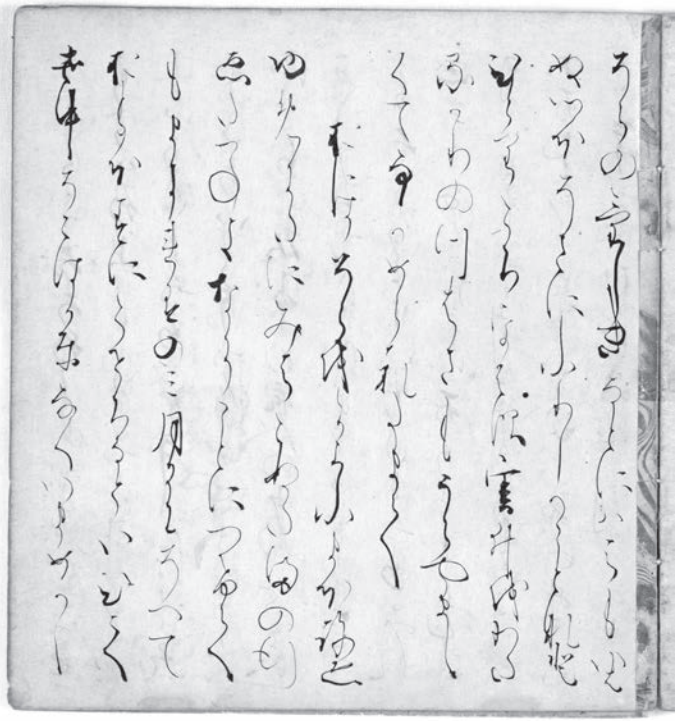
（二四オ、一四一九・3～7）

1 しのことについたちころはま
2 きらはしけなりいまゝてへにける
3 月日よとおほすにもいとゝあ
4 きれてあかしくらしたま
5 ふ御き日に上下の人いもゐし
6 てかの曼陀羅なと今日そ供
7 養せさせたまふけるれいの御を
8 こなひに御てうつなとまいりて
9 中将のきみ
10 きみ恋（こ）ふるなみたはきはも
11 なかりけりけふをはなにのはてと



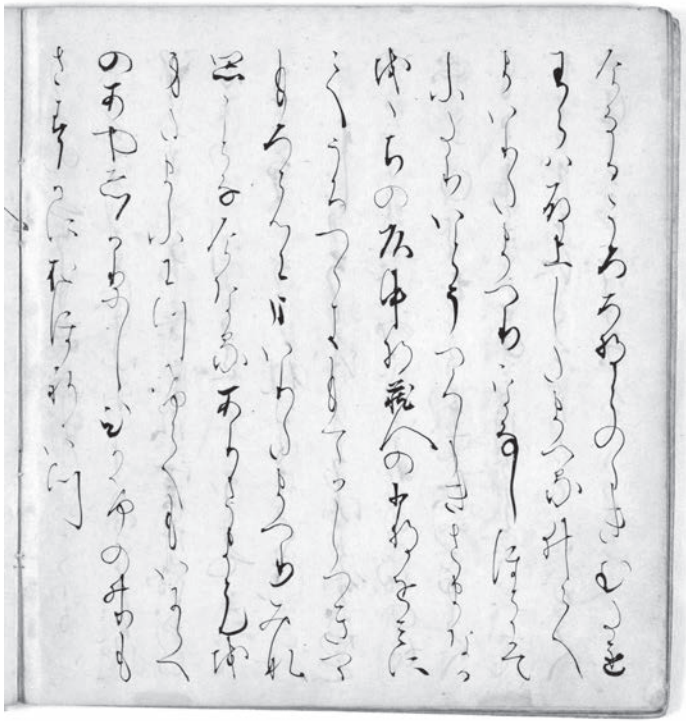
1 いふらむとあふきにかきたるを
2 とりて見たまひて
3 人恋(こ)ふる我身はすゑ(ふ)になり
4 ゆけとのこりおほかるなみた
5 なりけりとかきつけたまふ九日
6 きくのはなをこらむして
7 もろともにをきゐしきく
8 のあさつゆも一人たもとにか、
9 る秋かな神無月になりて
10 しくれかちなるころいと、な
11 かめたまひてゆふくれの

（二四ウ、一四一九・7～12）



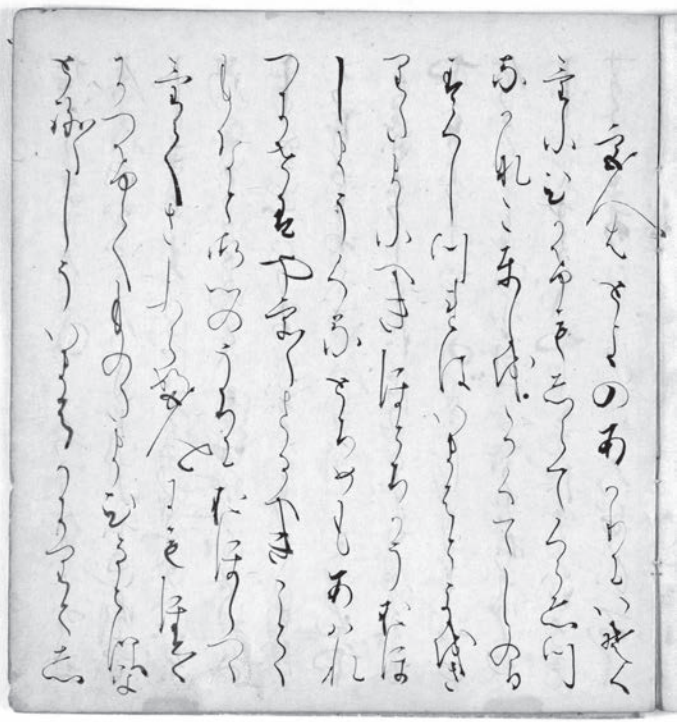
（二五才、一四一九・12～二〇・3）

1 そらのけしきなとにはえもいは
2 ぬ心ほそさにふりしかことなと
3 ひとりこちをはす雲ゐをわた
4 るかりのつはさもうらやまし
5 くてなかめられたまて
6 おほそらをかよふまほろし
7 ゆめにたにみえこぬたまの行
8 ゑたつねよなにことにつけて
9 もまきれすのみ月日にそへて
10 おもほすにこせちなといひて
11 世中そこはかとなくいまめかし



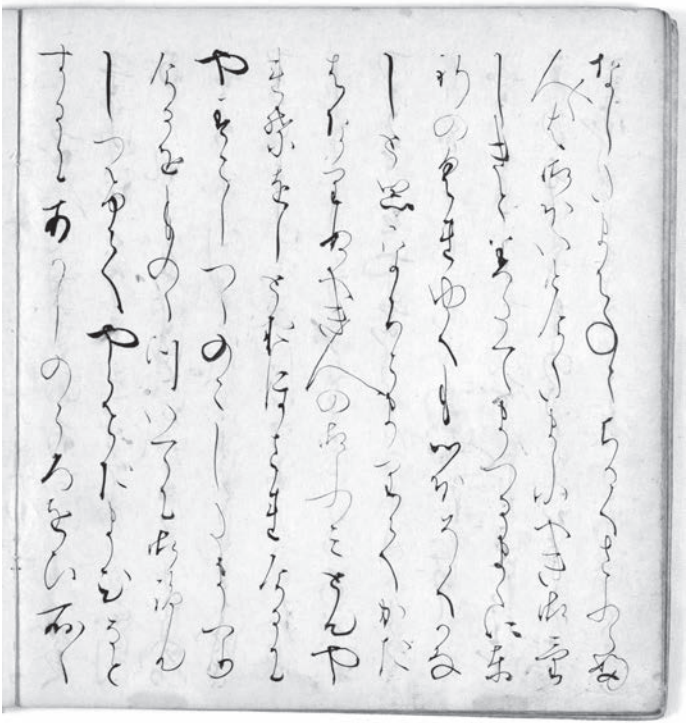
（二五ウ、一四二〇・3～7）

1 けなるころ大将との、きむたち
2 わらは殿上したまへるゐて
3 まいりたまへりをなしほとにて
4 ふたりいとうつくしきさまなる
5 を、ちの頭中将蔵人の少将をみに
6 てうちつ、きもてかしつきつ、
7 もろともにまいりたまへりみな
8 思ことなけなるありさまともを
9 みたまふにつけてもいにしへ
10 のあやしかりしひかけのおりも
11 さすかにおほしいつ



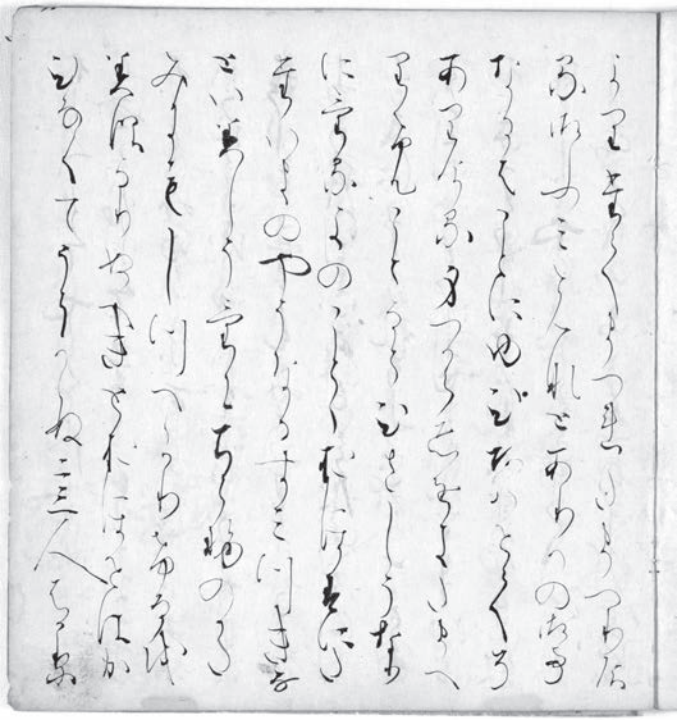
（二六オ、一四二〇・7～12）

1　宮人はとよのあかりにいそく
2　けふひかけもしらてくらしつ
3　るかなことしをかくてしのひ
4　すくしつれはいまはとよをさ
5　りたまふへきほとちかうおほ
6　しまうくるとちめもあはれ
7　つきせすやう〳〵さるへきこと、
8　もなと御心のうちにおほしつゝ、
9　けてさふらふ人々にもほと〳〵
10　につけてものたまひなとすを
11　とろ〳〵しういまはかきりとし



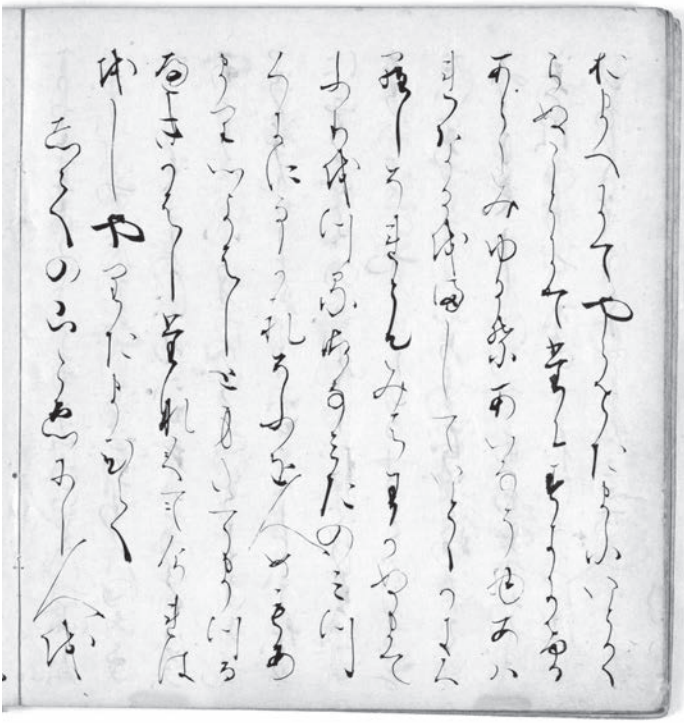
（二六ウ、一四二〇・12〜二一・2）

1 なしたまはねとちかくさふらふ
2 人々は御ほいとけたまふへき御け
3 しきとみたてまつるまゝにと
4 しのくれゆくも心ほそくかな
5 しと思をちとまりてかた
6 はなりぬへき人の御ふみともや
7 れはをしとおほされけるに
8 やすこしつゝのこしたまへり
9 けるをものゝついてに御覧
10 しつけてやらせたまひなと
11 するにあかしのころをひ所〳〵



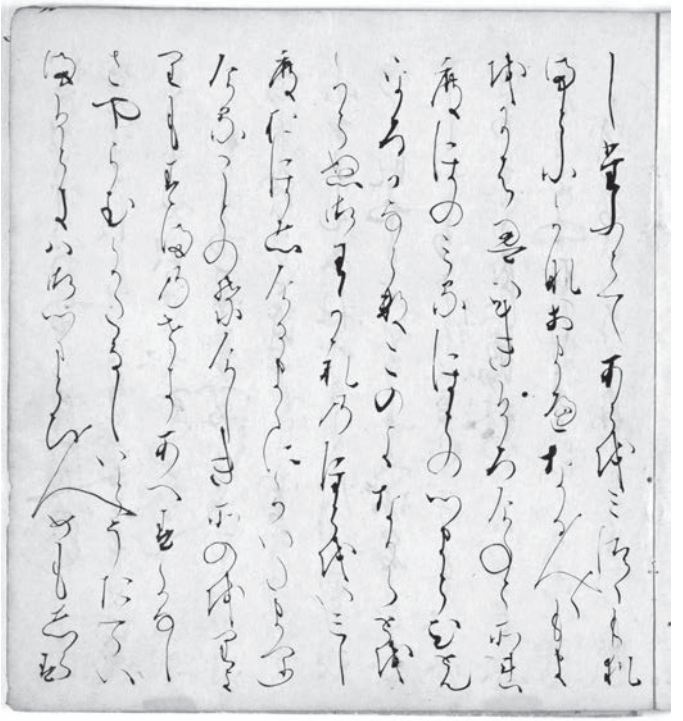
（二七オ、一四二一・2～6）

1 よりたてまつれたまへりけ
2 る御ふみともなとありかの御て
3 なるはことにゆひあはせてそ
4 ありける身つからしをきたまへ
5 りけんことなとひさしうなり
6 にけるよのこと、おほすにた
7 たいまのやうなるすみつきな
8 といみしうけにちとせのかた
9 みにもしつへかりけるを
10 みすなりぬへきとおほせはか
11 ひなくてうとからぬ二三人はかり



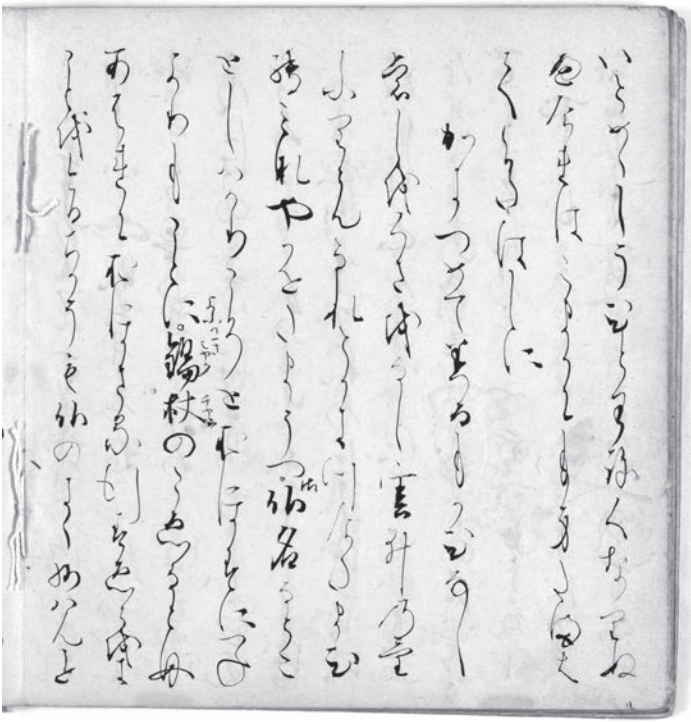
1 おまへにてやらせたまふいとかゝ
2 らぬことにてたにすきにける
3 あとゝとみゆるはあいなう物あは
4 れなるをましていとゝかきく
5 らしそれともみえわかぬまて
6 ふりをつる御なみたのみつ
7 くきになかれそふを人めもあ
8 まり心よはしとみたてまつる
9 へきかはしたなくてけれは
10 をしやりたまひて
11 しての山こゑにし人を

（二七ウ、一四二・6～10）



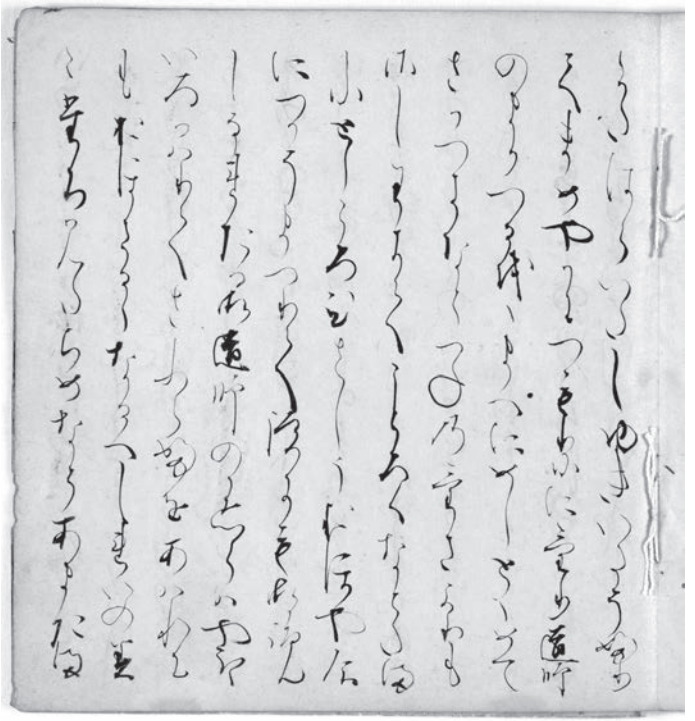
（二八オ、一四二一・10～14）

1 したふとてあとをみつゝも猶
2 まとふかなおまへなる人々もま
3 をにはえひきひろけねとそれ
4 とほのみるほとの心まとひとも
5 をろかならすこのよなからとを
6 からぬ御わかれのほとをいみし
7 とおほしけるまゝにかいたまへり
8 けることの葉けしきそのをりよ
9 りもすまのせきあへすかなし
10 さやらむかたなしいとうたてい
11 まひときは御心まとひ人めもしらす



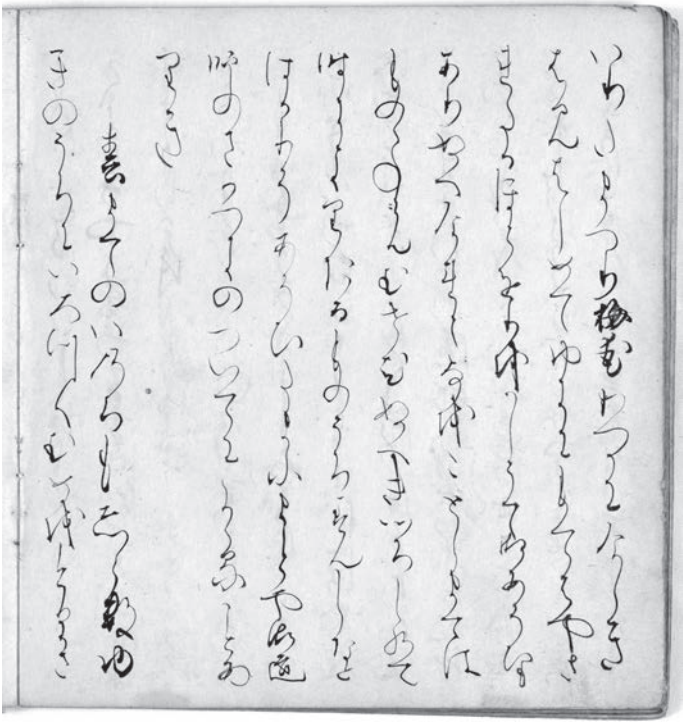
（二八ウ、一四二一・14〜二・5）

1 いとめ、しうひとわろくなりぬ
2 へけれはこまかにもみたまは
3 てかたはしに
4 　かきつめてみるもかひなし
5 もしをくさをなし雲ゐのけ
6 ふりともなれとかきつけたまひ
7 てみなやかせたまうつ ○御仏名なとこ
8 としはかりこそとおほすにつね
9 よふかき
よりもことに ○錫杖（シャクチャウ）のこゑなとも
10 あはれにおほさる行すゑとをき
11 ことをこひちかふも仏のきゝ給はんこと



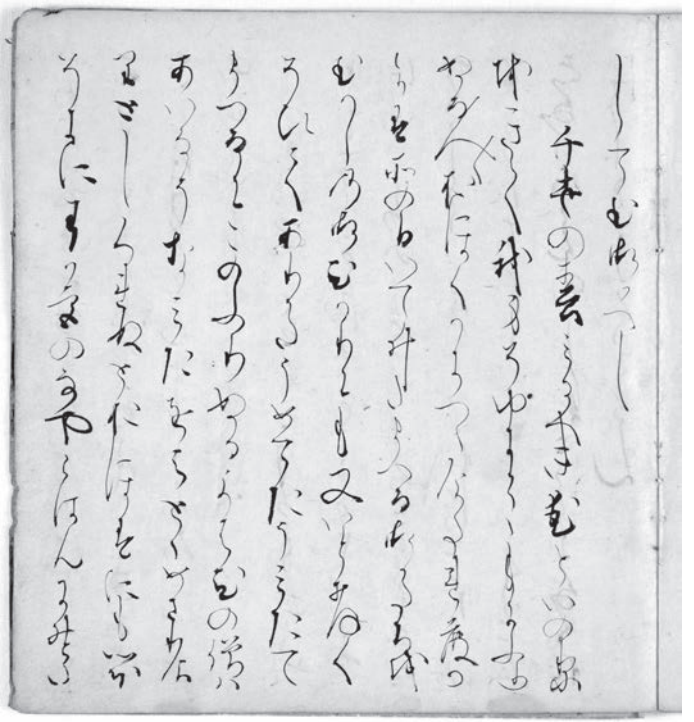
（二九オ、一四二・5～9）

1 かたはらいたしゆきいたうふり
2 てまめやかにつもりにけり道師(ママ)
3 のまかつるをゝまへにめしとゝめて
4 さかつきなとつねのけさよりも
5 さしわきてことろくなとたま
6 ふとしころひさしうおほやけ
7 につかうまつりて院にも御覧
8 しなれたる御道師(ママ)のかしらはやう〳〵
9 いろかはりてさふらふをあはれに
10 もおほさるゝなるへしれいのみ
11 こたちかんたちめなとあまたま



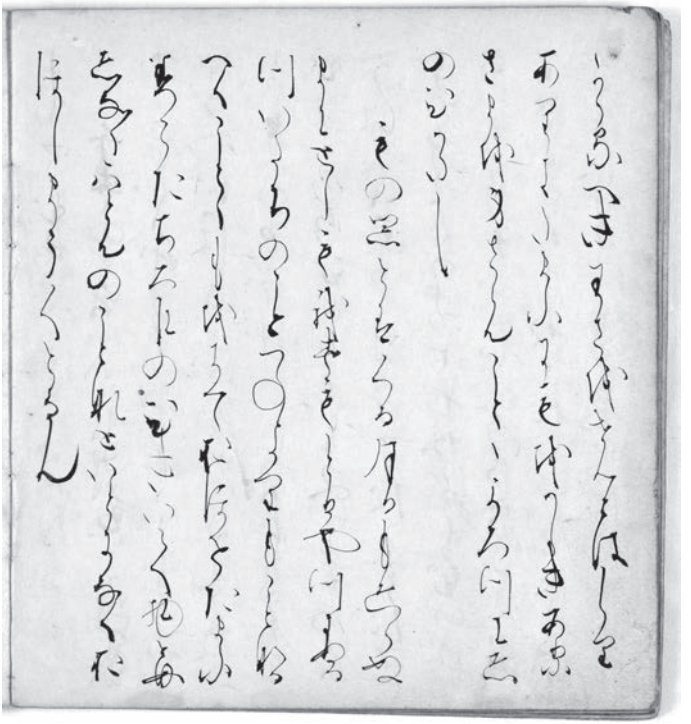
（二九ウ、一四二一・9～13）

1 いりたまへり梅花わつかにけしき
2 はみはしめてゆきにもてはやさ
3 れたるほとをりをかしうて御あそひも
4 ありぬへけれとなをことしまては
5 もの、ねにもむせひぬへき心ちし給て
6 時によりたるものうちすんしなと
7 はかりそあそひたまふまことや御道（ママ）
8 師のさかつきのついてにかゝることあ
9 りき
10 春までのいのちもしらすゆ
11 きのうちにいろつくむめを今日かさ



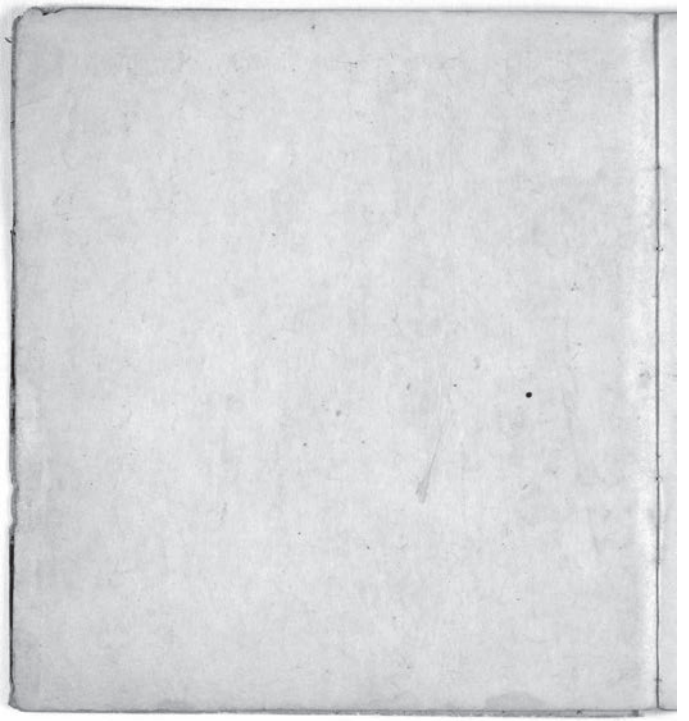
（三〇オ、一四二二・13〜三・4）

1 してむ御かへし
2 千世の春みるへき花といのり
3 をきて我身そゆきとゝもにふり
4 ぬる人々おほくかきつゝけたれとか
5 かすその日いてゐたまへる御かたちを
6 むかしの御ひかりにも又いとおほく
7 そひてありかたうめてたうみたて
8 まつるにこのふりぬるよはひの僧は
9 あいなうなみたをえとゝめさりけ
10 りとしくれぬとおほすにも心ほ
11 そきにわか宮のなやらはんにおとた



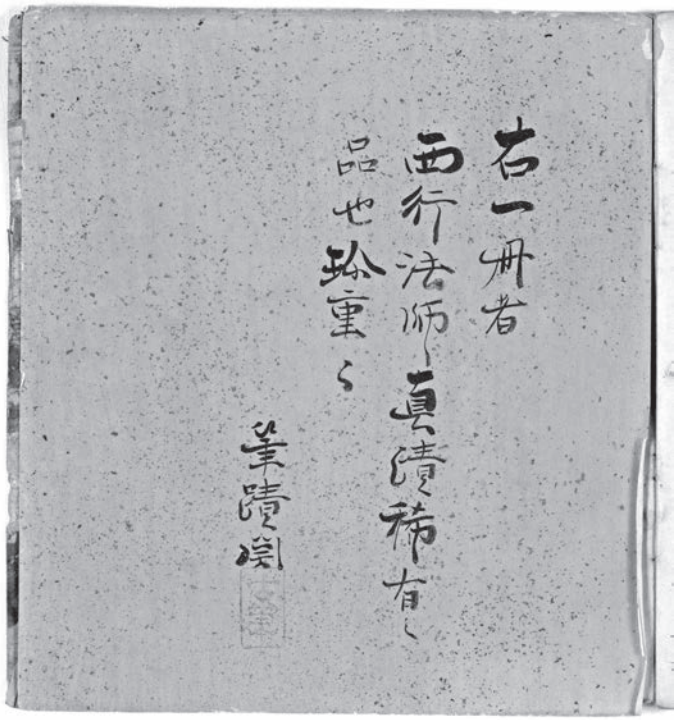
（三〇ウ、一四二三・4～8）

1 かゝるへきわさをせんとはしり
2 ありきたまふにもをかしきあり
3 さまをみさらんことゝよろつにし
4 のひかたし
5 　もの思とすくる月日もしらぬ
6 まにとしも我世も今日やつきぬる
7 ついたちのことつねよりもことなる
8 へくことゝもをきておほせたまふ
9 みこたち大臣のひきいて物とも
10 しな〳〵六とものことなといとになくお
11 ほしまうくとなん



（裏遊紙表）

（裏遊紙裏）




（裏見返し・鑑定貼紙）

（裏表紙）